

春琴抄

谷崎潤一郎

青空文庫



春琴、ほんとうの名は鴟屋琴、大阪道修町の葉種商の生れで歿年は明治十九年十月十四日、墓は市内下寺町の浄土宗の某寺にある。せんだって通りかかりにお墓参りをする気になり立ち寄つて案内を乞うと「鴟屋さんの墓所はこちらでございませう」といつて寺男が本堂のうしろの方へ連れて行つた。見るとひと叢の椿の木かげに鴟屋家代々の墓が数基ならんでいたのであつたが琴女の墓らしいものはそのあたりには見あたらなかつた。むかし鴟屋家の娘にしかじかの人があつたはずですがその人のはというとしばらく考えていて「それならあれにありますのがそれかも分りませぬ」と東側の急な坂路になつてゐる段々の上へ連れて行く。知つての通り下寺町の東側のうしろには生国魂神社のある高台が聳えているので今いう急な坂路は寺の境内からその高台へつづく斜面なのであるが、そこは大阪にはちよつと珍しい樹木の繁つた場所であつて琴女の墓はその斜面の中腹を平らにしたささやかな空地に建つていた。光誉春琴恵照禅定尼、と、墓石の表面に法名を記し裏面に俗名鴟屋琴、号春琴、明治十九年十月十四日歿、行年五拾八歳とあつて、

側面に、門人温井佐助建之と刻してある。琴女は生涯鴎屋姓を名のつていたけれども「門人」温井 檢校と事実上の夫婦生活をいとなんでいたのかく鴎屋家の墓地と離れたところへ別に一基を選んだのであろうか。寺男の話では鴎屋の家はどうに没落してしまいい近年は稀に一族の者がお参りに来るだけであるがそれも琴女の墓を訪うことはほとんどないのでこれが鴎屋さんの身内のお方のものであろうとは思わなかったという。するとこの仏さまは無縁になつていのですかという、いえ無縁という訳ではありませぬ萩の茶屋の方に住んでおられる七十恰好の老婦人が年に一二度お参りに来られます、その方はこのお墓へお参りをされて、それから、そこに小さなお墓があるでしよう、その墓の左脇にある別な墓を指し示しながらきつとそのあとでこのお墓へも香華を手向けて行かれますお経料などもそのお方がお上げになりますという。寺男が示した今の小さな墓標の前へ行つて見ると石の大きさは琴女の墓の半分くらいである。表面に眞誉琴台正道信士と刻し裏面に俗名温井佐助、号琴台、鴎屋春琴門人、明治四十年十月十四日歿、行年八拾三歳とある。すなわちこれが温井檢校の墓であつた。萩の茶屋の老婦人というのは後に出て来るからここには説くまいただこの墓が春琴の墓にくらべて小さくかつその墓石に門人である旨を記して死後にも師弟の礼を守つているところに檢校の遺志がある。私

は、おりから夕日が墓石の表にあかあかと照っているその丘おかの上にたすんで脚下にひろがる
 大大阪市の景観を眺めた。けだしこのあたりは難波津なにわづの昔からある丘きゆうり陵りやう地帯で西向き
 の高台がここからずつと天王寺てんのうじの方へ続いている。そして現在では煤煙ばいえんで痛めつけら
 れた木の葉や草の葉に生色がなく埃まびれほこりに立ち枯れた大木が殺風景さつふうけいな感じを与えるが
 これらの墓が建てられた当時はもつと鬱蒼うっそうとしていたであろうし今も市内の墓地として
 はまずこの辺が一番閑静かんせいで見晴らしのよい場所であろう。奇くしき因縁いんねんに纏まとわれた二人
 の師弟は夕靄ゆうもやの底に大ビルディングが数知れず屹きつりつ立する東洋一の工業都市を見下しな
 がら、永久にここに眠ねむっているのである。それにしても今日の大阪は検校が在りし日おもかけの倅
 をとどめぬまでに變つてしまったがこの二つの墓石のみは今も浅からぬ師弟の契ちぎりを語り
 合っているように見える。元来温井検校の家は日蓮宗にちれんしゆうであつて検校を除く温井一家の
 墓は検校の故郷こきやう江州かうしゆう日野町の某寺にある。しかるに検校が父祖代々の宗しゆう旨しゆうしを捨て
 て浄土宗に換かえたのは墓になつても春琴女の側そばを離れまいという殉情じゆんじやうから出たもので、
 春琴女の存生中、早くすでに師弟の法名、この二つの墓石の位置、釣合つりあい等が定められて
 あつたという。目分量で測つたところでは春琴女の墓石は高さ約六尺検校のは四尺に足ら
 ぬほどであろうか。二つは低い石いし甃いたみの壇だんの上に並んで立ったいて春琴女の墓の右脇みぎわき

にひと本の松もとまつが植えてあり緑の枝が墓石の上へ屋根のように伸びているのであるが、その枝の先が届かなくなつた左の方の二三尺離れたところに検校の墓が鞠躬きつぎゆう加じよとして侍坐じざするごとく控ひかえている。それを見ると生前検校がまめまめしく師に事つかえて影かげの形に添そううに扈こしよ従じゆしていた有様が偲しのばれたかもしに靈れいがあつて今日もなおその幸福を楽しんでいるようである。私は春琴女の墓前ひざますに跪うやうやいて恭こしく礼をした後検校の墓石に手をかけてその石の頭を愛撫あいぶしながら夕日が大市街のかなたに沈しずんでしまふまで丘の上に低徊ていかいしていた



近頃ちかごろ私の手に入れたものに「鴟屋春琴伝」という小冊子がありこれが私の春琴女を知るに至いたつた端緒たんちよであるがこの書は生漉きすきの和紙へ四号活字で印刷した三十枚ほどのもので察するところ春琴女の三回忌きに弟子の検校が誰たれかに頼んで師の伝記を編ひませ配り物にでもしたのであろう。されば内容は文章体で綴つづつてあり検校のことも三人称しよで書いてあるけれども恐おそらく材料は検校が授けたものに違ちがいなくこの書のほんとうの著者は検校その人であ

ると見て差支えあるまい。伝によると「春琴の家は代々鴟屋安左衛門を称し、大阪道修町に住して薬種商を営む。春琴の父に至りて七代目也。母しげ女は京都麩屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を挙ぐ。春琴はその第二女にして文政十二年五月二十四日をもつて生る」とある。また曰く、「春琴幼にして穎悟、加うるに容姿端麗にして高雅なること譬えんに物なし。四歳の頃より舞を習いけるに拳措進退の法自ら備わりてさす手ひく手の優艶なること舞妓も及ばぬほどなりければ、師もしばしば舌を巻きて、あわれこの児、この材と質とをもつてせば天下に嬌名を謳われんこと期して待つべきに、良家の子女に生れたるは幸とや云わん不幸とや云わんと呟きしかや。また早くより読み書きの道を学ぶに上達すこぶる速かにして二人の兄をさえ凌駕したりき」と。これらの記事が春琴を視ること神のごとくであつたらしい検校から出たものとすればどれほど信を置いてよいか分らないけれども彼女の生れつきの容貌が「端麗にして高雅」であつたことはいろいろな事実から立証される。当時は婦人の身長が一体に低かつたようであるが彼女も身の丈が五尺に充たず顔や手足の道具が非常に小作りで繊細を極めていたという。今日伝わっている春琴女が三十七歳の時の写真というものを見るのに、輪郭の整つた瓜実顔に、一つ一つ可愛い指で摘まみ上げたような小柄な今にも消えてなくなりそ

うな柔かな目鼻がついている。何分にも明治初年か慶応頃の撮影であるからところどころに星が出たりして遠い昔の記憶のごとくうすれているのでそのためにも見えるのでもあろうが、その朦朧とした写真では大阪の富裕な町家の婦人らしい気品を認められる以外に、うつくしいけれどもこれという個性の閃めきがなく印象の稀薄な感じがする。年恰好も三十七歳といえども見えまた二十七八歳のようにも見えなくはない。この時の春琴女はすでに両眼の明を失つてから二十有余年の後であるけれども盲目というよりは眼をつぶっているという風に見える。かつて佐藤春夫が云つたことに聾者は愚人のように見え盲人は賢者のように見えるという説があつた。なぜならつんぼは人の云うことを聴こうとして眉をしかめ眼や口を開け首を傾けたり仰向けたりするので何となく聞の抜けたところがあるしかるに盲人はずかに端坐して首をうつ向け、瞑目沈思するかのごとき様子をするからいかにも考え深そうに見えるというのであつて果して一般に当てはまるかどうか分らないがそれは一つには仏菩薩の眼、慈眼視衆生という慈眼なるものは半眼に閉じた眼であるからそれを見馴れているわれわれは開いた眼よりも閉じた眼の方に慈悲や有難みを覚えある場合には畏れを抱くのであろうか。されば春琴女の閉じた眼瞼にもそれが取り分け優しい女人であるせいも古い絵像の観世音を拝んだようなほの

かな慈悲を感じるのである。聞くところによると春琴女の写眞は後にも先にもこれ一枚しかないのであるという彼女が幼少の頃はまだ写真術が輸入されておらずまたこの写眞を撮つた同じ年に偶ぐうぜん然ある災難が起りそれより後は決して写真などを写さなかつたはずであるから、われわれはこの朦朧たる一枚の映像をたよりに彼女の風貌ふうぼうを想見するより仕方がない。読者は上述の説明を読んでどういふ風な面立ちおもたを浮かべられたか恐らく物足りなおそいぼんやりしたものを心に描えがかれたであろうが、仮りに實際の写眞を見られても格別これ以上にはつきり分るということはなからうあるいは写真の方が読者の空想されるものよりもっとぼやけているでもあろう。考えてみると彼女がこの写眞をうつした年すなわち春琴女が三十七歳のおりに検校もまた盲人になつたのであつて、検校がこの世で最後に見た彼女の姿はこの映像に近いものであつたかと思われる。すると晩年の検校が記憶きおくの中に存していた彼女の姿もこの程度にぼやけたものではなかつたであろうか。それとも次第しだいにうすれ去る記憶を空想で補つて行くうちにこれとは全然異なつた一人の別な貴い女人にょにんを作り上げていたであらうか

春琴伝は続けて曰く、「されば両親も琴女を視ること掌中の珠のごとく、五人の兄妹達に超えて唯りこの児を寵愛しけるに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾くもなくしてついに全く両眼の明を失いければ、父母の悲歎大方ならず、母は我が児の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂せるがごとくなりき。春琴これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志すに至りぬ」と。春琴の眼疾というのは何であつたか明かでなく伝にもこれ以上の記載がないが後に検校が人に語つてまことに喬木は風に如まれるとやら、お師匠さまはご器量や芸能が諸人にすぐれておられたばかりに一生のうち二度までも人の嫉みをお受けなされたお師匠さまの御不運は全くこの二度のご災難のお蔭じやと云つたのを思い合わせれば、何かその間に事情が伏在するようでもある。検校はまたお師匠さまのは風眼であつたとも云つた。春琴女は甘やかされて育つたために驕慢などころはあつたけれども言語動作が愛嬌に富み目下の者への思いやりが深く加うるに至つて花やかな陽気な性質であつたから、人あたりもよく兄弟仲も睦まじく一家中の者に親しまれたが一番末の妹に附いていた乳母が両親の愛情の偏頗なのを憤つて密かに琴女を憎んでいたという。風眼というものは人も知るごとく花柳病の黴菌が眼の

粘膜を侵す時に生ずるのであるから、檢校の意は、けだしこの乳母がある手段をもって彼女を失明させたことを諷するのである。しかし確かな根拠があつてそう思うのか、檢校一人だけの想像説であるのか、明瞭でない。春琴女が後年の烈しい氣象を見れば、あるいはそういう事実が性格に影響を及ぼしたのかとも猜せられなくはないが、この事に限らず、檢校の説には春琴女の不幸を歎くあまり知らず識らず他人を傷つけ呪うような傾きがありにわかにごとごとくを信ずる訳に行かない乳母の一件なども恐らくは揣摩臆測に過ぎないであろう。要するにここではあえて原因を問わずただ九歳の時に盲目になつたことを記せば足りる。そして「これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志」した。つまり春琴女が思いを音曲にひそめるようになったのは失明した結果だということになり、彼女自身も自分のほんとうの天分は舞にあつた、わたしの琴や三味線を褒める人があるのはわたしというものを知らないからだ、眼さえ見えたら自分は決して音曲の方へは行かなかつたのにと常に檢校に述べ懐したという。これは半面に自分の不得意な音曲でさえこのくらいに出来るといふ風に聞え、彼女の驕慢な一端が窺われるがこの言葉なども多少檢校の修飾が加わつてはいはしないか、少くとも彼女が一時の感情に任せて発した言葉を有難く肝に銘じて聴き、彼女を偉くするために重大な意味を持たせた嫌いがありは

しないか。前掲ぜんげいの萩の茶屋に住んでいる老婦人というのは鳴沢しぎさわでるといい生田流いくたの勾こ当うとうで晩年の春琴と温井検校じょうに親しく仕えた人であるがこの勾当こうとうの話わを聞くに、お師匠ししやうさま「春琴のこと」は舞まがお上手じょうずだったそうにござりませんが琴や三味線も五つ六つの時分から春松という検校けんぎょうさんに手ほどきをしておもらいなされそれからずっと稽古けいこを励をんでおられました、それ故ゆえ盲目めいもくになつてから始めて音曲おんきょくを習まわれたのではないのでござりませぬ、よいお内うちの娘むすめさん方は皆みな早くから遊芸ゆうげいのけいこをされますがその頃の習慣じゆんぱんでござりましたお師匠ししやうさまは十の歳さいにあのむずかしい「残月ざんげつ」の曲うたを聞き覚えて独ひとりで三味線さんまいせんにお取りなされたと申まをしますそうしてみれば音曲おんきょくの方かたにも生れつきの天才てんさいを備そなえておられたのでござりませぬかな凡ぼんじん人ひとには真似まねられぬことことでござりますただ盲目めいもくになられてからは外ほかに楽しみたのしみがござりませぬので一層いっそう深くこの道みちへお這はい入りなされ、精魂せいこんを打ち込まれたのかとぞんじますとのことである。多分たぶんこの説せつの方がほんとうなので彼女の真まの才能たのうは実は始めより音楽おんがくに存ぞんしたのであろう舞踊ぶようの方かたは果はしてどの程度ていどであつたか疑うたがわしく思おもわれる

音曲の道に精魂を打ち込んだとはいふものの生計の心配をする身分ではないから最初はそれを職業にしようというほどの考はなかつたであろう後に彼女が琴曲の師匠として門戸を構えたのは別種の事情がそこへ導いたのであり、そうなるからでもそれで生計を立てたのではなく月々道修町の名家から仕送る金子の方が比較にならぬほど多額だったのであるが、彼女の驕奢と贅沢とはそれでも支えきれなかつた。されば始めは格別将来の目算もなくただ好きにまかせて一生懸命に技を研いたのであるが天稟の才能に熱心が拍車をかけたので、「十五歳の頃春琴の技大いに進みて儕輩を抽んで、同門の子弟にして実力春琴に比肩する者一人もなかりき」とあるのは恐らく事実であろう。鴨沢勾当曰くお師匠さまがいつも自慢をされましたのに春松検校は随分稽古が厳しいお方だつたけれど、わたしは身に沁みて叱られたということがなかつた褒められたことの方が多かつた、私が行くとお師匠さんは必ずご自分で稽古をつけて下されそれはそれは親切に優しく教えて下さるのでお師匠さんを怖がる人たちの気が知れなんだということでござりませぬ、ござりませぬから修行の苦しみというものを知らずにあれまでにおなりなされたのは天品だつたのでござりませうと。けだし春琴は鴟屋のお嬢様であるからいかに厳格な師匠で

も芸人の児を仕込むような烈しい待遇をする訳に行かない幾分か手心を加えたのである。うその間にはまた、千金の家に生れながら不幸にして盲目となった可憐な少女を庇護する感情もあつたろうけれども何よりも師の檢校は彼女の才を愛し、それに惚れ込んだのであつた。彼は我が児以上に春琴の身を案じたまたま微恙で欠席する等のことがあれば直ちに使を道修町に走らせあるいは自ら杖を曳いて見舞つた。常に春琴を弟子に持つてゐることを誇りとして人に吹聴し玄人筋の門弟たちが大勢集まつてゐる所で前達は鴟屋のこいさんの芸を手本とせよ〔注、大阪では「お嬢さん」のことを「糸さん」あるいは「とうさん」といい姉娘に対して妹娘を「小糸さん」あるいは「こいさん」などと呼び分けること現在もしかり。春松檢校は春琴の姉にも手ほどきをしたことあり家庭的に親しかつたので春琴をかく呼んだのであろう〕今に腕一本で食へて行かなければならない者が素人のこいさんに及ばないようでは心細いぞといった。また春琴をいたわり過ぎるといふ批難があつた時何をいふぞ師たる者が稽古をつけるには厳しくするこそ親切なのじやわしがあの児を叱らぬのはそれだけ親切が足らぬのじやあの児は天性芸道に明るく悟りが速いから捨てて置いて進む所までは進む本気で叩き込んだらばいよいよ後生畏ろしい者になり本職の弟子共が困るであろう、何も結構な家に生れて世過ぎに不自由のない娘をそれほど

に教え込まずとも鈍根どんこんの者をこそ一人前に仕立ててやろうと力ちから癩こぶを入れてゐるのに、
何という心得違こころあはれいをいうぞといった



春松検校の家は鞆うつぼにあつて道修町の鴉屋の店からは十丁ほどの距離きよりであつたが春琴は毎日
丁稚ていぢに手を曳ひかれて稽古に通つたその丁稚ていぢというのが当時佐助と云つた少年で後の温井検
校であり、春琴との縁がかくして生じたのである。佐助は前に述べたごとく江州日野の産
であつて実家はやはり葉屋を営み彼の父も祖父も見習い時代に大阪に出て鴉屋に奉公をし
たことがあるという鴉屋は実に佐助に取つて累代るいだいの名家であつた。春琴より四つ歳上で
十三歳の時に始めて奉公に上つたのであるから春琴が九つの歳すなわち失明した歳に当る
が彼が来た時は既に春琴の美しい瞳ひとみが永久に鎖とぎされた後であつた。佐助はこのことを、春
琴の瞳の光を一度も見なかつたことを後年に至るまで悔くいていないかえつて幸福であると
した。もし失明以前を知つていたら失明後の顔が不完全なものに見えたらうけれども幸い
彼は彼女の容貌に何一つ不足なものを感かじなかつた最初から円満具足した顔に見えた。今

日大阪の上流の家庭は争つて邸宅を郊外に移し、令嬢たちもまたスポーツに親しんで野外の空気や日光に触れるから以前のような深窓の佳人式箱入娘はいなくなつてしまつたが現在でも市中に住んでいる子供たちは一般に体格が纖弱で顔の色なども概して青白い田舎育ちの少年少女とは皮膚の冴え方が違う良く云えば垢抜けがしているが悪く云えば病的である。これは大阪に限つたことでなく都会の通有性だけれども江戸では女でも黒いのを自慢にしたくらいで色の白きは京阪に及ばない大阪の旧家に育つたぼんちなどは男でさえ芝居に出て来る若旦那そのままにきゃしゃで骨細なのがあり、三十歳前後に至つて始めて顔が赭く焼けて来て脂肪を湛え急に体が太り出して紳士然たる貫禄を備えるようになるその時分までは全く婦女子も同様に色が白く衣服の好みも随分柔弱なのである。まして旧幕時代の豊かな町人の家に生れ、非衛生的な奥深い部屋に垂れ籠めて育つた娘たちの透き徹るような白さと青さと細さとはどれほどであつたか田舎者の佐助少年の眼にそれがいかばかり妖しく艶に映つたか。この時春琴の姉が十二歳すぐ下の妹が六歳で、ぽつと出の佐助にはいずれも鄙には稀な少女に見えた分けても盲目の春琴の不思議な氣韻に打たれたという。春琴の閉じた眼瞼が姉妹たちの開いた瞳より明るくも美しくも思われてこの顔はこれではなければいけないのだこうあるのが本来だという感じがした。四人

の姉妹のうちで春琴が最も器量よしという評判が高かったのは、たといそれが事実だとしても幾分か彼女の不具を憐れみ惜しむ感情が手伝っていたであろうが佐助に至ってはそうでなかつた。後日佐助は自分の春琴に対する愛が同情や憐愍から生じたという風に云われることを何よりも厭いそんな觀察をする者があると心外千万であるとした。わしはお師匠様のお顔を見てお気の毒とかお可哀そうとか思つたことは一遍もないぞお師匠様に比べると眼明きの方がみじめだぞお師匠様があのご氣象とご器量で何で人の憐れみを求められよう佐助どんは可哀そうじやとかえつてわしを憐れんで下すつたものじや、わしやお前達は眼鼻が揃つているだけで外の事は何一つお師匠様に及ばぬわしたちの方が片羽ではないかと云つた。ただしそれは後の話で佐助は最初燃えるような崇拜の念を胸の奥底に秘めながらまめまめしく仕えていたのであろうまだ恋愛という自覚はなかつたであろうし、あつても相手は頑是ないこいさんである上に累代の主家のお嬢様である佐助としてはお供の役を仰せ付かつて毎日一緒に道を歩くことの出来るのがせめてもの慰めであつただろう。いったい新参の少年の身をもつて大切なお嬢様の手曳きを命ぜられたというのは変なようだが始めは佐助に限っていたのではなく女中が附いて行くこともあり外の小僧や若僧が供をすることもありいろいろであつたのをある時春琴が「佐助どんにしてほしい」

といつたのでそれから佐助の役に極きまったそれは佐助が十四歳になってからである。彼は無上の光榮に感かん激げきしながらいつも春琴の小さな掌てのひらを己おのれの掌のの中に収めて十丁の道のりを春松檢校の家に行き稽古の済むのを待つて再び連れて戻もどるのであつたが途中春琴はめつたに口を利いたことがなく、佐助もお嬢様が話しかけて来ない限りは黙もく々もくとしてただ過ちのないように気を配つた。春琴は「何でこいさんは佐助どんがええお云いでしたんでつか」と尋たずねる者があつた時「誰よりもおとなしゆうていらんこと云えへんよつて」と答えたのであつた。元來彼女は愛嬌いんこうに富み人あたりが良かったことは前に述べた通りだけれども失明以來氣むずかしく陰鬱いんうつになり晴れやかな声を出すことや笑うことが少く口が重くなつていたので、佐助が余計なおしやべりをせず役目だけを大切に勤めて邪魔じゃまにならぬようにしている所が氣に入つたのであるかも知れない「佐助は彼女の笑う顔を見るのが厭いやであつたというけだし盲人が笑う時は間が抜けて哀あわれに見える佐助の感情ではそれが堪たえられなかつたのであろう」

おしやべりをしないから邪魔にならぬからというのが果して春琴の真意であったか佐助の憧しょうけい憬の一念がおぼろげに通じて子供ながらもそれを嬉うれしく思ったのではなかったか十歳の少女にそういうことは有り得ないとも考えられるが、俊しゅん敏びんで早そう熟じゅくの上に盲目になつた結果として第六感の神経が研とぎ澄すまされてもいたことを思うと必ずしも突とつ飛びな想像であるとはいえない気位の高い春琴は後に恋愛を意識するようになってからでも容易に胸中を打ち明けず久しい間佐助に許さなかつたのである。さればそこに多少の疑問はあるけれどもとにかく始め佐助というものの存在はほとんど春琴の念頭にないかのごとくであつた少くとも佐助にはそう見えた。手曳きをする時佐助は左の手を春琴の肩かたの高さに捧ささげて掌を上に向けそれへ彼女の右の掌を受けるのであつたが春琴には佐助というものが一つの掌に過ぎないようであつたまたま用をさせる時にもしぐさで示したり顔をしかめてみせたり謎なぞをかけるようにひとりごとを洩もらしたりしてどうせよこうせよとはつきり意志を云い現わすことはなく、それを気が付かずにいると必ず機嫌きげんが悪いので佐助は絶えず春琴の顔つきや動作を見落さぬように緊きん張ちやうしていなければならずあたかも注意深さの程度を試されているように感じた。もともと我が儘まなお嬢様育ちのところへ盲人に特有な意地悪さも加わつて片時も佐助に油断する暇いとまを与えなかつた。ある時春松検校の家で稽古の順

番が廻つて来るのを待つている間にふと春琴の姿が見えなくなつたので佐助が驚いてその辺を捜すと知らぬ間に厠に行つていたのであつた。いつも小用に立つ時には黙つて春琴が出て行くのをそれと察して追いかけながら戸口まで手を曳いて連れて行き、そこに待つていて手水の水をかけてやるのに今日は佐助がうつかりしていたのでそのまま独り手さぐりで行つたのである。「濟まんことでござりました」と佐助は声をふるわせながら、厠から出て手水鉢の柄杓を取ろうと手を伸ばしている少女の前に駈けて来て云つたが春琴は「もうええ」と云いつつ首を振つた。しかしこういう場合「もうええ」といわれても「そうでござりますか」と引き退つては一層後がいけないのである無理にも柄杓をぎ取るようにして水をかけてやるのがコツなのである。またある夏の日の午後に順番を待つている時うしろに畏まつて控えていると「暑い」と独りごとを洩らした「暑うござりますなあ」とおあいそを云つてみたが何の返事もせずしばらくするとまた「暑い」という、心づいて有り合わせた団扇を取り背中の方からあおいでやるとそれで納得したようであつたが少しでもあおぎ方が気が抜けるとすぐ「暑い」を繰り返した。春琴の強情と気儘とはかくのごとくであつたけれども特に佐助に対する時がそうなのであつていずれの奉公人にもという訳ではなかつた元来そういう素質があつたところへ佐助が努めて意を迎えるようにし

たので、彼に対してのみその傾向が極端になつて行つたのである彼女が佐助を最も便利に思つた理由もここにあるのであり佐助もまたそれを苦役と感ぜずむしろ喜んだのであつた彼女の特別な意地悪さを甘えられてるように取り、一種の恩寵のごとくに解したのでもあろう

○

春松検校が弟子に稽古をつける部屋は奥の中二階にあつたので佐助は番が廻つて来ると春琴を導いて段梯子を上り検校とさし向いの席に直らせて琴なり三味線なりをその前に置き、いったん控え室へ下つて稽古の終るのを待ち再び迎えに行くのであるが待つてゐる間ももう済む頃かと油断なく耳を立てていて済んだら呼ばれない中に直ちに立つて行くようにしたされば春琴の習つてゐる音曲が自然と耳につくようになるのも道理である佐助の音楽趣味はかくして養われたのであつた。後年一流の大家になつた人であるから生れつきの才能もあつたらうけれどももし春琴に仕える機会を与えられずまた何かにつけて彼女に同化しようとする熱烈な愛情がなかつたならば、恐らく佐助は鴉屋の暖簾を分けてもらい

一介いつかいの薬種商として平凡へいほんに世を終つたであろう後年盲目となり検校の位を称してからも常に自分の技は遠く春琴に及ばずと為し全くお師匠様の啓けいはつ発によつてここまで来たのであるといつていた。春琴を九天の高さに持ち上げ百歩も二百歩も謙へりくだつていた佐助であるからかかる言葉をそのまま受け取る訳には行かないが、技の優劣ゆうれつはとにかくとして春琴の方がより天才てんさい肌はだであり佐助は刻苦精励せきれいする努力家であつただけは間違ひがあるまい。彼が密ひそかに一挺いつちようの三味線を手に入れようとして主家から給される時々の手あてや使い先で貰もらう祝儀しゆぎなどを貯金し出したのは十四歳の暮くれであつて翌年の夏ようよう粗末そまつな稽古三味線を買ひ求めると番頭ばんとうに見咎みとがめられぬように棹さおと胴どうとを別々に天井裏てんじょううらの寝部屋べやへ持ち込み、夜な夜な朋輩ほうばいの寝静まるのを待つて独り稽古をしたのである。しかし当初は、父祖の業を継ぐ目的で丁稚奉公に住み込んだ身の将来これを本職にしようといふ覚悟かくごも自信もあつたのではなかつたただ春琴に忠実である余り彼女の好むところのものを己おのれも好むようになりそれが昂こうじた結果であり音曲をもつて彼女の愛を得る手段に供しようなどの心すらもなかつたことは、彼女にさえ極力秘していた一事をもつて明かである。佐助は五六人の手代や丁稚共と立つと頭がつかえるような低い狭い部屋せまへ寝るので彼等かれらの眠りねむを妨さまたげぬことを条件として内証ないしやうにしておいてくれるように頼んだ。幾いくら眠つても寝足

りない年頃としごろの奉公人共は床に這入るとたちまちぐっすり寝入ってしまふから苦情をいう者はいなかつたけれども佐助は皆が熟じゆくすい睡すいするのを待って起き上り布団ふとんを出したあとの押入おしいれの中で稽古をした。それでなくても天井裏は蒸し暑いのに押入の中の夏の夜の暑さは格別であつたに違ひないがこうすると絃げんの音の外へ洩れるのを防ぐことが出来、鼾いびきごえや寢言など外部の音おんきよう響ひびをも遮断しやだんするに都合が好かつたもちろん爪弾つまびきで撥ばちは使えなかつた燈火のない真ま暗くらな所で手さぐりで弾くのである。しかし佐助はその暗闇くらやみを少しも不便に感じなかつた盲目の人は常にこう云う闇の中にいるこいさんもまたこの闇の中で三味線を弾きなさるのだと思うと、自分も同じ暗黒世界に身を置くことがこの上もなく樂しかつた後に公然と稽古することを許可されてからもこいさんと同じにしなければ濟まないと云つて樂器を手にする時は眼をつぶるのが癖くせであつたつまり眼明きでありながら盲目の春琴と同じ苦難を嘗なめようとし、盲人の不自由な境きようが涯がいを出るだけ体験しようとして時には盲人を羨うらやむかのごとくであつた彼が後年ほんとうの盲人になつたのは実に少年時代からのそういう心がけが影響しているので、思えば偶然ぐうぜんでないのである

いずれの楽器も蘊奥うんおうを極めることのむずかしさは同一であろうがヴァイオリンと三味線とはツボに何の印もなくかつ弾奏だんそうの度たぎごとに絃げんの調子を整えてかかる必要があるのと通り弾ひけるようになるまでが容易でなく独稽古ひとりげいこには最も不向きであるいわんや音譜おんぶのない時代においてをや師匠についても琴は三月三味線は三年と普通ふつうに云われる。佐助は琴のような高価な楽器を買う金もなし第一あんな嵩張かさばるものを担ぎ込む訳に行かないので三味線から始めたのであるが調子を合わせることは最初から出来たというそれは音を聴きき分ける生れつきの感覚が少くともコンマ以上であったことを示すと共に、平素春琴に随ずい行こうして検校の家で待つている間にいかに注意深く他人の稽古を聴いていたかを証するに足りる。調子の区別も曲の詞も音の高低も節ふしまわ廻まわしも総すべて彼は耳の記憶きおくを頼りにしなければならなかったそれ以外に頼るものは何もなかった。かくして十五歳の夏から約半歳の間は幸い同室の朋輩の外に誰にも知られずに済んだのであったがその年の冬に至って一つの事件じけんが起つたある夜明け方と云つても冬の午前四時頃まだ真つ暗な夜中も同然の時刻に、鴟べり屋りょうにんの御寮人ごりょうにんすなわち春琴の母のしげ女がふと厠に起きてどこからともなく洩れて来る「雪」の曲を聞いたのである。昔は寒稽古と云つて寒中夜のしらしら明けに風に吹き曝さらさ

れながら稽古をするという習慣があつたけれども道修町は薬屋の多い区域であつて堅儀な
 店舗が軒を列ね遊芸の師匠や芸人などの住宅のある所でもなしなまめかしい種類の家は一
 軒もないのであるそれにしんしんと更けた真夜中、寒稽古にしても時刻があまり突飛過
 ぎる、寒稽古なら一生懸命撥音たかく弾くであろうに微かな爪弾きで弾いているそのくせ
 一つ所を合点の行くまで繰り返して練習しているらしく熱心のさまが想いやられた。鴟屋
 の御寮人は訝しみながらもその時は大して気にも止めず寝てしまつたがその後二三次も夜
 中起き出でることに耳についたことがありそう云えば私も聞きましたどこで弾いているの
 でござりましょう、狸の腹鼓とも違うようござりますなどと云う者も出て来て店員
 たちの知らぬ間に奥で問題になつていた。佐助は夏以来ずっと押入の中でしていればよか
 ったのだが誰も気が付きそうにないので大胆になつて来たのと、何分激しい業務の余暇
 に睡眠時間を盗んでは稽古するのであるから次第に寝不足が溜つて来て暖い所だとい
 居睡りが襲つて来るので、秋の末頃から夜な夜なそつと物干台に出て弾いた。いつも夜
 の四つ時すなわち午後十時には店員たちと共に眠りにつき午前三時頃に眼を覚まして三味
 線を抱えて物干台に出るそうして冷たい夜気に触れつつ独習を続け東が仄かに白み初める
 刻限に至つて再び寢床に帰るのである春琴の母が聞いたのはそれであつた。けだし佐助が

忍び出た物干台というのは店舗の屋上にあつたのであろうから真下に寝ている店員共よりも中前裁を隔てた奥の者が渡り廊下の雨戸を開けた時にまずその音を聞きつけたのである。奥からの注意で店員共が取り調べられ結局佐助の所為と分つて一番番頭の前に呼びつけられ大眼玉を喰つた上に以後は断じて罷りならぬと三味線を没収されたことは当然の成行を見た訳であるが、この時意外な所から佐助に救いの手が伸ばされたとかくどのくらい弾けるものか聴いてみたいという意見が奥から持ち出されたのであるしかもその首唱者は春琴であつた。佐助はこの事が春琴に知れたら定めし機嫌を損ずるであらうただ与えられた手曳きの役をしていればよいのに丁稚の分際で生意気な真似をすると憫殺されるか嘲笑されるか、どつちみち碌なことはあるまいと恐れを抱いていただけに「聴いてやろう」と云われるとかえつて尻込みをした。自分の誠意が天に通じてこいさんの心を動かしたのなら有難いけれども多分一場の笑い草にしてやろうという慰み半分のみならずであるとしか思えなかつたしそれに人前で聴かせるほどの自信もなかつた。しかし聴こうと云い出したからはいかに辞退しても許すはずのない春琴である上に母親や姉妹たちも好奇心に駆られているのでついに奥の間へ呼び出され独習の結果を披露することになつたのである彼に取つてはまことに晴れの場面であつた。当時佐助は五つ六つの曲をど

うやらこなすまでに仕上げていたので知っているだけをやってみよと云われるままに度胸を据すえて精限り根限り弾いた「黒髪くろかみ」のようなやさしいものや「茶音頭」のような難曲もとや素もとより何の順序もなく聞き囁かじりで習ったのであるからいろいろのものを不規則に覚えていたのである。鴟屋の家族は佐助が邪推じやしういしたように笑い草にする積りであつたかも知れないが、短時日の独稽古にしてはかんどころも確かなら節廻しも出来ていることが分つて聴いた後には皆感心した



春琴伝に曰く「時に春琴は佐助が志を憐み、汝なんじの熱心に賞めでて以後は妾わらわが教えて取らせん、汝余暇よかあらば常に妾を師と頼みて稽古を励むべしと云い、春琴の父安左衛門もついにこれを許しければ佐助は天にも昇のぼる心地して丁稚の業務に服する傍かたわら日々一定の時間を限り指南を仰ぐこととはなりぬ。かくて十一歳の少女と十五歳の少年とは主従の上に今また師弟の契ちぎりを結びたるぞ目出度めでたき」と。氣むずかしやの春琴が佐助に対して突とつぜん然かかると示したのはなぜであつたらうか実は春琴の発意ではなく周囲の者がそう仕向けたのであると

もいう。思うに盲目の少女は幸福な家庭にあつてもややもすれば孤独こどくに陥り易く憂鬱ゆううつになりがちであるから親たちはもちろん下々しもしもの女中共まで彼女の取扱とりあつかいに困り、何とかして心を慰め気を晴らさせる術もあらばと苦慮くりよしていた矢先たまたま佐助が彼女と趣味を同じゆうすることを知つたのである。大方こいさんの我が儘わに手を焼いていた奥の奉公人たちは佐助にお相手役をなすり付けて少しでも自分たちの荷を軽くしようという考から、何と佐助どんは奇特なものではござりませぬかあれをせつかくこいさんが仕込んでおやりなされましたらどうぞござります定めし本人も冥加みょうがに余り喜ぶこととござりましようなどと水を向けたのではなかつたであろうか。ただし下手へたにおだてるとツムジを曲げる春琴であるから必ずしも周囲の仕向けに乗せられたのではないかも知れぬさすがに彼女もこの時に至つて佐助を憎にくからず思うようになり心の奥底に春水の湧わき出づるものがあつたのかも知れぬ。何にしても彼女が佐助を弟子に持とうと云い出してくれたのは親兄弟や奉公人共に取つて有難いことだつたいくら天才児だと云つても十一歳の女師匠が果して人を教えることが出来るかどうかは問う所でない、ただそういう風にして彼女の退屈たいくつが紛まぎれてくれれば端はたの者が助かる云わば「学校ごっこ」のような遊戯ゆうぎをあてがい佐助にお相手を命じたのである。だから佐助のためよりも春琴のために計らつたことなのであるが結果から見

れば佐助の方が遥かに多く恩沢に浴した。伝には「丁稚の業務に服する傍日々一定の時間を限り」とあるけれども今までも毎日手曳きを勤め一日の中の何時間かはこいさんに仕えていたのであるその上こいさんの部屋へ呼ばれて音楽の授業を受けたとすると店の仕事を顧みる暇はなかつたであろう。安左衛門は商人に仕立てる積りで預かつた子を娘の守りにしてしまつては国元の親たちに済まぬという心づかひもあつたらしいが丁稚一人の将来よりも春琴の機嫌を取る方が大切であつたし佐助自身もそれを望んでいる以上、また当分はそうして置いてもと黙許の形になつたのであらうと思われる。佐助が春琴を「お師匠様」と呼び出したのはこの時からであつて常には「こいさん」と呼んでよいが授業の間は必ずそう呼ぶように春琴が命じたそして彼女も「佐助どん」と云わずに「佐助」と云い、すべて春松検校がその内弟子を遇する様を真似厳重に師弟の礼を執らせたかくして大人たちの企図したごとくたわいのない「学校ごっこ」が続けられ春琴もそれに紛れて孤独を忘れていたのであるが、二人はその後月を重ね年を経ても一向この遊戯を中止する模様がなかつたかえつて二三年後には教える方も教えられる方も次第に遊戯の域を脱して真剣になつた。春琴の日課は午後二時頃に鞆の検校の家へ出かけて三十分ないし一時間稽古を授かり帰宅後日の暮れまで習つて来たものを練習する。さて夕食を済ませてから時々

気が向いた折に佐助を二階の居間へ招いて教授するそれがついには毎日欠かさず教えるようになりどうかすると九時十時に至つてもなお許さず、「佐助、わてそんなこと教せたか」「あかん、あかん、弾けるまで夜通しかかたかて遣りや」と激しく叱咤する声がしばしば階下の奉公人共を驚かした時によるとこの幼い女師匠は「阿呆、何で覚えられへんねん」と罵りながら撥をもつて頭を殴り弟子がしくしく泣き出すことも珍しくなかつた

○

昔は遊芸を仕込むにも火の出るような凄じい稽古をつけ往々弟子に体刑を加えることがあつたのは人のよく知る通りである本年「昭和八年」二月十二日の大阪朝日新聞日曜のページに「人形浄瑠璃の血まみれ修業」と題して小倉敬二君が書いている記事を見るに、撰津大掾亡き後の名人三代目越路太夫の眉間には大きな傷痕が三日月型に残つていたそれは師匠豊沢団七から「いつになつたら覚えるのか」と撥で突き倒された記念であるというまた文楽座の人形使い吉田玉次郎の後頭部にも同じような傷痕がある玉次郎若かりし頃「阿波の鳴門」で彼の師匠の大名吉田玉造が捕り物の場の十郎兵衛を使い玉次郎が

その人形の足を使った、その時キツト極まるべき十郎兵衛の足がいかにしても師匠玉造の
 気に入るように使えない「阿呆め」というなり立廻りに使っていた本身の刀でいきなり後
 頭部をガンとやられたその刀痕が今も消えずにいるのである。しかも玉次郎を殴つた玉造
 もかつて師匠金四のために十郎兵衛の人形をもつて頭を叩き割られ人形が血で真赤に染ま
 った。彼はその血だらけになって碎け飛んだ人形の足を師匠に請うて貰い受け真綿にくる
 み白木の箱に収めて、時々取り出しては慈母の霊前に額すくがごとく礼拝した「この人
 形の折檻がなかつたら自分は一生凡々たる芸人の末で終つたかも知れない」としばし
 ば泣いて人に語つた。先代大隅太夫は修業時代には一見牛のように鈍重で「のろま」
 と呼ばれていたが彼の師匠は有名な豊沢団平俗に「大団平」と云われる近代の三味線の巨
 匠であつたある時蒸し暑い真夏の夜にこの大隅が師匠の家で木下蔭挟合戦の
 「壬生村」を稽古してもらつていると「守り袋は遺品ぞと」というくだりがどうしても巧
 く語れない遣り直し遣り直して何遍繰り返してもよいと云つてくれない師匠団平は蚊帳
 を吊つて中に這入つて聴いている大隅は蚊に血を吸われつつ百遍、二百遍、三百遍と際限
 もなく繰り返しているうちに早や夏の夜の明け易くあたりが白み初めて来て師匠もいつか
 くだびれたのであろう寝入つてしまったようであるそれでも「よし」と云つてくれない

ちはと「のろま」の特色を發揮してどこまでも一生懸命根氣よく遣り直し遣り直して語っていることやがて「出来た」と蚊帳の中から団平の声、寝入ったように見えた師匠はまんじりともせずに聴いていてくれたのであるおよそかくのごとき逸話は枚挙に遑なくあえて浄瑠璃の太夫や人形使いに限ったことではない生田流の琴や三味線の伝授においても同様であったそれにこの方の師匠は大概盲人の検校であったから不具者の常として片意地な人が多く勢い苛酷に走った傾きがないでもあるまい。春琴の師匠春松検校の教授法もつとに厳格をもつて聞えていたことは前述のごとくややもすれば怒罵が飛び手が伸びた教える方も盲人なら教わる方も盲人の場合が多かったので師匠に叱られたり打たれたりする度に少しづつ後ずさりをし、ついに三味線を抱えたまま中二階の段梯子を転げ落ちるような騒ぎも起った。後日春琴が琴曲指南の看板を掲げ弟子を取るようになってから稽古振りの峻烈をもつて鳴らしたのもやはり先師の方法を踏襲したのであり由来する所がある訳なのだが、それは佐助を教えた時代から既に萌していたのであるすなわち若い女師匠の遊戯から始まり次第に本物に進化したのである。あるいは云う男の師匠が弟子を折檻する例は多々あるけれども女だてらに男の弟子を打ったり殴ったりしたという春琴のごときは他に類が少いこれをもつて思うに幾分嗜虐性の傾向があったのではないか稽古に事寄

せて一種変態な性慾的快味を享樂していたのではないかと。果してしかるや否や今日において断定を下すことは困難であるただ明白な一事は、子供がままごと遊びをする時は必ず大人の真似をするされば彼女も自分は検校に愛せられていたのでかつて己れの肉体に痛棒を喫したことはないが日頃の師匠の流儀を知り師たる者はあのようにするのが本来であると幼心に合点して、遊戯の際に早くも検校の真似をするに至ったのは自然の数でありそれが昂じて習い性となつたのであろう



佐助は泣き虫であつたものかこいさんに打たれる度にいつも泣いたというそれがまことに意気地なくひいひいと声を挙げるので「またこいさんの折檻が始まつた」と端の者は眉をひそめた。最初こいさんに遊戯をあてがった積りの大人たちもここに至つてすこぶる当惑した毎夜おそくまで琴や三味線の音が聞えるのさえやかましいのに間々春琴の激しい語調で叱り飛ばす声加わりその上に佐助の泣く声が夜の更けるまで耳についたりするのであるあれでは佐助どんも可哀そうだし第一こいさんのためにならぬと女中の誰彼が見

るに見かねて稽古の現場へ割つて這入りとうさんまあ何という事でんの姫御前のあられもない男の児にえらいことしやはりまんねんなあと止めだてでもすると春琴はかえつて肅然と襟を正してあんた等知つたこつちやない放ツといてと威丈高になつて云つたわてほんまに教せてやつてるねんで、遊びごつちやないねん佐助のためを思やこそ一生懸命になつてるねんどれくらい怒つたかていじめたかて稽古は稽古やないかないな、あんた等知らんのか。これを春琴伝は記して汝等妾を少女と侮りあえて芸道の神聖を冒さんとするや、たとい幼少なりとていやしくも人に教うる以上師たる者には師の道あり、妾が佐助に技を授くるはもとより一時の児戯にあらず、佐助は生来音曲を好めども丁稚の身として立派なる検校にも就く能わず独習するが不憫さに、未熟ながらも妾が代りて師匠となりいかにもして彼が望みを達せしめんと欲する也、汝等が知る所に非ず疾くこの場を去るべしと毅然として云い放ちければ、聞く者その威容に怖れ弁舌に驚き這々の体にて引き退るを常としたりきと云つているもつて春琴の勢い込んだ劍幕を想像することが出来よう。佐助も泣きはしたけれども彼女のそういう言葉を聞いては無限の感謝を捧げたのであつた彼の泣くのは辛さを咏えるのみにあらず主とも師匠とも頼む少女の激励に対する有難涙も籠つていた故にどんな痛い目に遭つても逃げはしなかつた泣きながら最後まで忍耐し

「よし」と云われるまで練習した。春琴は日によつて機嫌のよい時と悪い時とがあり口やかましく叱言こしごを云うのはまだよい方で黙つて眉まゆを顰ひそめたまま三の絃いとをびんと強く鳴らしたりまたは佐助一人に三味線を弾かせ可否を云わずにじつと聴いていたりするそんな時こそ佐助は最も泣かされた。ある晩のこと茶音頭のてしと手事を稽古していると佐助の呑み込みのこが悪くてなかなか覚えないう幾度いくどやつても間違えるのに業を煮にやして例のごとく自分は三味線を下に置き、やあチリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリガーチテン、トツントツンルン、やアルルトンと右手で激しく膝ひざを叩たたきながら口三味線で教えていたがついに黙然もくねんとして突つつ放ばなしてしまった。佐助は取り着しまく嶋もなくさればと云つて止やめる訳わけにも行かず何とか彼かとか独りで考かえては弾ひいているといつまで立つてもよいと云つてくれないうそうなるかと逆上してますますトチリ出す体中に冷汗ひやあせが湧わく何が何やら出鱈目でたらめを弾くばかりであるしかも春琴は寂然じやくねんとして一層唇くちびるを固く閉じ眉根まゆねに深く刻んだ皺しわをピクリともさせないかくのごときこと二時間以上に及んだ頃母親のしげ女が寝間着姿で上つて来て、熱心にも程がある度が過ぎては体に毒だからと宥なだめるようにして二人を引き分けた。明る日春琴は両親の前へ呼び出されてそなたが佐助に教えてやる親切は結構だけれども弟子のしを罵ののつたり打うつたりするのは人も許し我も許す検校さんのすること也なりそなたはいかに上手

と云つても自分がまだお師匠さんに習っているのに今からそんな真似をしては必ず慢心の基もとになろうおよそ芸事は慢心したら上達はしませぬ、あまつさえ女の身として男を捉とらえ阿呆あほうなどと口汚くちぎたなく云うのは聞ききづら辛つらしあれだけはなにとぞ慎つつしんで下されもうこれからは時間を定めて夜が更ふけぬうちに止やめたがよい佐助のひいひい泣く声が耳について皆が寝られないで困りますと、ついぞ叱言をいったことのない父と母とが懇ねんごろに説諭せつゆしたのでさすがの春琴も返す言葉がなく道理に服ていした体であつたがそれも表面だけのことで実際は余り利き目がなかつた。佐助は何という意気地なしぞ男の癖くせに些細ささいなことに怵こらえ性もなく声を立てて泣く故ゆえにさも仰ぎようさん山らしく聞きえお蔭かげで私が叱ちられた、芸道に精しやうじん進しんせんとならば痛さ骨身にこたえるとも齒を喰くいしばつて堪たえ忍しのぶがよいそれが出来ないなら私も師匠を断ことわりますとかえつて佐助に嫌味いやみを云つた爾来じらい佐助はどんなに辛くとも決して声を立てなかつた

○

鴟屋もすやの夫婦は娘春琴が失明以来だんだん意地悪になるのに加えて稽古が始まつてから粗暴そぼう

な振舞ふるまいさえするようになったのを少からず案じていたらいまことに娘が佐助という相手を得たことは善よし悪あしであつた佐助が彼女の機嫌を取つてくれるのは有あり難がたいけれども何事もご無理ごもつともで通す所から次第に娘を増長させる結果になり将来どんなに根性のひねくれた女が出来るかも知れぬと密ひそかに胸を痛めたのであらう。それかあらぬか佐助は十八歳の冬から改めて主人の計らいに依つて春松検校の門に這はい入つたすなわち春琴が直接教授することを封ふうじてしまつたのである。これは親達の考かんがえでは娘が師匠の真似まねをするのが最も悪い何よりも娘の品性に良からぬ影響を与えると見たからであつたらうが同時に佐助の運命もこの時に決した訳であるこの時以来佐助は完全に丁稚の任務を解かれ名実共に春琴の手曳てびきとしてまた相弟子あいでしとして検校の家へ通うようになった。本人がそれを望んだのは云うまでもないとして安左衛門も大いに国元の親達を説き付け諒解りようかいを得るように努めた商人になる目的を放棄ほうきさせる代りには行末ゆくすえのことを保証し必ず捨てて置かぬからとそこは言葉を尽したものと察せられる。按あんずるに安左衛門夫婦は春琴のために慮おもんばか助を婿むこに貰もらつたらと云う意志が動いていたのであらう不具の娘であつてみれば対等の結婚はむずかしい佐助ならば願つてもない良縁りようえんであると思うのも無理からぬ所である。しこうしてその翌々年すなわち春琴十六歳佐助二十歳の時始めて親達は結婚のことを諷ふうした

のであつたが意外にも彼女はにべもなく峻拒した自分は一生夫を持つ気はない殊に佐助などとは思いも寄らぬと甚しい不機嫌であつたしかるに何ぞ図らんそれより一年を経て春琴の体にただならぬ様子が見えることを母親が感づいたのであるまさかとは思つたけれども内々気を付けてみるとどうも怪しい、人眼に立つようになつてからでは奉公人の口がうるさい今のうちならとかく繕う道もあるうと父親にも知らせずそつと当人に尋ねるとそんな覚えはさらさらないと云う深くも追及しかねるので腑に落ちないながら一箇月ほど捨てておくうちにもはや事実を蔽い隠せぬまでになつた。今度は春琴は素直に妊娠を認めたがいかに聞かれても相手を云わない強いて問い詰めるとお互に名を云わぬ約束をしたと云う佐助かと云えば何であるのような丁稚風情にと頭から否定した。誰しも一往佐助に疑いを持つて行くところであるけれども親たちにしても去年の春琴の言葉があるのでよもやと思つたのであるそれにそう云う関係があればなかなか人前を隠し切れぬもの、経験の浅い少女と少年がどんなに平氣を装つても嗅ぎ付かれずにはいないものだが佐助が同門の後輩となつてからは以前のように夜更けるまで対坐する機会もなく時折兄弟子の格式をもつておさらいをしてやるぐらいなものその他の時はどこまでも氣位の高いこいさんであつて、佐助を遇するに手曳き以上の扱いはしていないようなので奉公人共も二人の間に

間違ひがあろうとは思つても見なかつたむしろ主従の区別が有り過ぎ情味が乏しいほどに思えた。しかし佐助に聞いたならば様子が知れよう相手はきつと検校の門下生であろうと見当をつけたが佐助も知らぬ存ぜぬの一点張りで、自分の身に覚えのないのもちろん誰といつて心あたりもないと云う。けれどもこの時御寮人の前へ呼ばれた佐助の態度がオドオドして胡散臭いのに不審が加わり問い詰めて行くと辻褄の合わないことが出て来て実はそれを申しましてはこいさんに叱られますからと泣き出してしまった。いやいやこいさんを庇うのはよいが主人の云い付けをなぜ聴かぬ隠し立てをしてはかえつてこいさんのためになりませぬ是非相手の名を云つてごらんと口を酸っぱくしても云わぬそれでも結局のところ相手はやはり当の本人の佐助であることが言外に酌み取れた決して白状しませぬとこいさんに約束した手前を恐れて明瞭には云わないのだがそれを察してもらいたそうに云うのであった。鴟屋夫婦は出来てしまったことは仕方がないしまあまあ佐助だったのはよかつたそのくらいなら去年縁組をすすめた時なぜあのような心にもないことを云つたのやら娘気というものはたわいのないものと愁いのうちにも安堵の胸をさすり、この上は人の口端にかからぬうち早く一緒にさせる方がと改めて春琴に持ちかけてみると、またしてもそんな話はいやでござります去年も申しましたように佐助などとは考えて

もみませぬこと、私の身を不憫ふびんがつて下さいますのは忝かたじけのうござりますますがいかに不自由な体なればとて奉公人を婿むこに持とうとまでは思いませんお腹なかの子の父親に対しても済まぬことでござりますと顔色を変えて云うのであるではそのお腹の子の父親はと聞けばそればかりは尋ねたずないで下さりませどうでその人に添そう積りはござりませぬという。そうなるもまた佐助の言葉がアヤフヤに思えどちらの云うことが本当やらさっぱり訳が分らなくなり困こづじ果てたが佐助以外に相手があるうとも考えられず今となつてはきまりが悪いのでわざと反對なことを云うのであろうそのうちには本音を吐はくであらうともうそれ以上の詮議せんぎは止めて取敢とりあえず身みふた二つになるまで有馬へ湯治とうじにやることにした。それは春琴が十七歳の五月で佐助は大阪に居残り女中二人が附き添そつて十月まで有馬に滞たいざい在ざいし目出度男の子を生んだその赤あかん坊ぼうの顔が佐助に瓜うり二つであつたとやらでようやく謎なぞが解けたようなもの、それでも春琴は縁組の相談に耳を借さないのでみならずいまだに佐助が赤児あかごの父親であることを否定する拠よん所どころなく二人を対決させてみると春琴は屹きつとなり佐助どん何なんぞ疑うたがはれるようなこと云うたんと違ちがうかわてが迷めい惑わくするよつて身に覚えのないことはなつきり明りを立ててほしいと云う釘くぎを打たれて佐助はひと縮みに縮み上り仮りにも御主のとうさんを滅めつ相そうなことでござります、子飼こがいの時より一ひと方かたならぬ大恩を受けながらそのような

身の程知らずの不料簡ふりようけんは起しませぬ思いも寄らぬ濡れ衣ぬぎぬでござりますと今度は春琴に口を合わせ徹頭徹尾てつとうてつび否認するのでいよいよ婿むらちが明かなくなつた。それでも生れた子が可愛かわいくはないかそなたがそんなに強情を張るなら父ていなし児ごを育てる訳には行かぬ断たつて縁組みが厭いやだとあれば可哀かわいそうでも嬰兒やごこはどこぞへくれてやるより仕方がないがと子を枷かせにして詰つめ寄るとなにとぞどこへなとお遣やりなされて下さりませ一生独り身で暮くらす私に足手まといでござりますと涼すずしい顔つきで云うのである

○

この時春琴が生んだ子はよそへ貰もらわれて行つたのである弘化こうか二年の生れに当るから今日存命ぞんめいしているとも思われないし貰もらわれて行つた先も知れていないいづれ両親りやうしんがしかるべく処置しよじしたのであろう。そんな訳でとうとう春琴は我がを張り通し妊にんしん娠しんの一件を有耶無耶うやむやに葬むつてまたいつの間まにか平気な顔で佐助に手曳てびきさせながら稽古きこに通つていたもうその時分彼女と佐助との関係はほとんど公然の秘密になつていたらしいそれを正式にさせようとすれば当人たちがあくまで否認するものだから、娘の氣象を知つている親達はやむをえず黙も

許つきよの形にしておいたと見えるかくして主従とも相弟子とも恋こい仲なかともつかぬ曖あい昧まいな状態が二三年つづいた後春琴二十歳の時春松檢校が死去したのを機会に独立して師匠の看板を掲かかげることになり親の家を出て淀屋橋筋よどやばしに一戸を構いつこえた同時に佐助も附ついて行ったのである。けだし彼女は檢校の生前すでに実力を認められいつにても独立して差支さしつかえないよう許可を得ていたことと思われる檢校は己おのれの名の一字を取って彼女に春琴という名を与え晴れの演奏の時しばしば彼女と合奏したり高い所を唄うたわせたりして常に引き立ててやっていたされば檢校亡なき後に門戸もんこを構なえるに至ったのは当然であるかも知れぬ。しかし彼女の年ねん齡れい境きよう遇ぐう等に照らしにわかなに独立する必要があつたらうとは考えられないこれは恐らく佐助との關係を慮おもつたのであろうというのは、もはや公然の秘密になつてゐる二人をいつまで曖あい昧まいな状態に置いては奉公人共どもの示しが付かずせめて一軒けんの家に同棲どうせいさせるという方法を取つたので春琴自身もその程度ならあえて不服はなかつたのであろう。もちろん佐助は淀屋橋へ行つてからも少しも前と異つた扱あつかいはされなかつたやはりどこまでも手曳きであつたその上檢校が死んだので再び春琴に師事することになり今は誰に遠慮えんりよもなく「お師匠様」と呼び「佐助」と呼ばれた。春琴は佐助と夫婦らしく見られるのを厭いとうこと甚はなはだしく主従の礼儀師弟れいぎの差別を嚴格にして言葉づかいの端々はしはしに至るまでやかましく

云い方を規定したまたまそれに悖ることがあれば平身低頭して詫まっても容易に赦さず執拗つようにその無礼を責めた。故に様子を知らない新参の入門者は二人の間を疑う由もなかつたというまた鴟屋の奉公人共はあれでこいさんはどんな顔をして佐助どんを口説くのだらうこつそり立ち聴きしてやりたいと蔭口を云つたといふなぜ春琴は佐助を待つことかくのごとくであつたか。ただし大阪は今日でも婚禮こんれいに家柄いえがらや資産や格式などを云々すること東京以上であり元来町人の見識の高い土地であるから封建ほうけんの世の風習は思いやられる従つて旧家の令嬢れいじやうとしての矜持きやうじを捨てぬ春琴のような娘が代々の家来筋に当る佐助を低く見下したことは想像以上であつたであらう。また盲目の僻みひがもあつて人に弱味を見せまい馬鹿ばかにされまいとの負けじ魂だましも燃えていたであらう。とすれば佐助を我が夫として迎えるなど全く己れを侮辱ぶじよくすることだと考えたかも知れぬよろしくこの辺の事情を察すべきであるつまり目下の人間と肉体の縁を結んだことを恥はずる心があり反動的によそよそしくしたのであらう。しからは春琴の佐助を見ること生理的必要品以上に出でなかつたであらうか多分意識的にはそうであつたかと思われる

伝に曰く「春琴居常潔癖けつぺきにしていささかにも垢着あかきたる物を纏まとわず、肌着類はだぎは毎日取と換りかえて洗濯せんたくを命じたりき。また朝夕に部屋むねの掃除そうじを励れい行こうせしむること厳密いんみつを極め、坐ざするごとに一々指頭さしづをもつて座布ざふ団畳だんじやう等の表面へんめんを撫なで試しみ毫釐ごうりんの塵埃じんあいをも厭いといたりき。かつて門弟もんていの胃を病む者あり、口中こうちゆうに臭しゆう気きあるを悟さとらず師しの前まへに出いでて稽古けいこしけるに、春琴例るいのごとく三の絃いしを鏗こう然ぜんと弾はきてそのまま三味線さんまいせんを置き、顰ひん蹙しゆくして一語いちごを発はせず、門弟もんてい為なす所ところを知らずして恐おそる理由りゆうを問とうこと再三さんさんに及びし時とき、妾めかけは盲人まんじんなれども鼻なは確たしかなり、々そうに去そつて含嗽がんそくをせよと云いはしとぞ」と。盲人まんじんなるが故ゆゑにかくのごとく潔癖けつぺきだったのでもあろうがまたこういう人が盲人まんじんであつたとすると身の周りの世話をする者の心づかいは推量すいりやうに余ある。手曳てひきという役やくは手を曳ひくばかりが受け持ちではない飲食おんじ起臥きふ入浴じゆう上じやう厠せ等とう日常生活じふじふの些事さじに亘わたつて面倒めんどうを見なければならぬしこうして佐助さすけは春琴はるきんの幼時わらわよりこれらの任務にんむを担当たんとうし性癖せいへきを呑のみ込んでいたので彼かれでなければ到底たいてい氣きに入いるようには行いかなかつた佐助さすけはむしろこの意味いみにおいて春琴はるきんに取り欠おとくべからざる存在ありである。それに道修町みちしゆまちの時分ときぶんにはまだ両親りやうしんや兄弟けいだい達たちへ氣きがねがあつたけれども一戸いっこの主あるしとなつてからは潔癖けつぺきと我わが儘ままが募つる一方いっぺで佐助さすけの用事ようじはますます煩多はんたを加くえたのであるこれは

鳴沢しぎさわてる女の話でさすがに伝には記してないが、お師匠様は廁から出ていらしても手
 をお洗いいになつたことがなかつたなぜなら用をお足しになるのにご自分の手は一いっぺん遍もお
 使いいにならない何かから何まで佐助どんがして上げた入浴の時もそうであつた高貴の婦人は
 平気で体じゆうを人に洗いわせて羞しゆうち恥ちということを知らぬというがお師匠様も佐助どんに
 対しては高貴の婦人と選ぶ所はなかつたそれは盲目のせいもあるうが幼い時からそういう
 習慣なに馴なれていたので今更何の感情も起おきなかつたのかも知れない。彼女はまた非常にお
 洒落しやれであつた失明以来鏡を覗のぞいたことはなくとも己れの容色については並々ならぬ自信が
 あり衣類や髪かみ飾かざりの配合等に苦勞することは眼明きと同じであつた思うに記憶きおく力の強
 い彼女は九歳の時の己れの顔立ちを長く覚えていたであらうしその上世間の評判や人々の
 お世辞が始終耳に這入るので自分の器量のすぐれていることはよく承知していたのである
 されば化粧けしやう粧まに浮身うきみを糞ふんすことは大抵たいていでなかつた。常に鶯うぐいすを飼かつていて糞ふんを糠ぬかに交まぜて
 使いいまた糸瓜へちまの水を珍ちんちやう重じゆうし顔や手足がつるつる滑すべるようになければ氣持を悪わるがり地肌
 の荒あれるのを最も忌いんだ総すべて絃楽器を弾ひく者は絃わきを押おささる必要上左手の指の爪つめの生はえ加
 減くわんげんを氣にするものだが必ず三日目ごとに爪つめを剪きらせ鑢やすりをかけさせたそれが左の手ばかりで
 なく両手両足に及んだ剪ると云つてもほとんど眼に見えて伸のびていないわずかに一厘りん二厘

に過ぎないのをいつも同じ恰好かっこうに正確に剪るように命じ剪った痕あとを一つ一つ手でさぐつて見て少しでも狂くるいがあることを許さなかつた佐助は実にこのような世話を一人で引き請うけ合間にはまた稽古をしてもらい時にはお師匠様に代つて後進の弟子達に教えもした

○

肉体の關係ということにもいろいろある佐助のごときは春琴の肉体の巨細こさいを知り悉つくして剩あます所なきに至り月並の夫婦關係や恋愛關係の夢想むそうだもしない密接な縁を結んだのである後年彼が己おのれもまた盲目になりながらなおよく春琴の身边に奉仕して大過なきを得たのは偶然でない。佐助は一生妻妾めとを娶らず丁稚時代より八十三歳の老後まで春琴以外に一人の異性をも知らずに終り他の婦人に比べてどうのこうのと云う資格はないけれども晩年やもめ鰥あか暮らしをするようになつてから常に春琴の皮膚ひふが世にも滑なめかで四肢ししが柔じゆう軟なんであつたことを左右の人に誇ほこつて已やまずそればかりが唯一の老いの繰くり言ごとであつたしばしば掌てのひらを伸べてお師匠様の足はちようどこの手の上へ載のるほどであつたと云い、また我が頬ほおを撫なでながら踵かかとの肉でさえ己のここよりはすべすべして柔やわかであつたと云つた。彼女が小柄こがらだつたことは

前に書いたが体は着痩せのする方で裸体の時は肉づきが思いの外豊かに色が抜けるほど白く幾つになつても肌はだに若々しいつやがあつた平素魚鳥の料理を好み分けても鯛たいの造りが好物で当時の婦人としては驚くべき美食家であり酒も少々は嗜たしなんで晩酌ばんしやくに一合は欠かさなかつたと云うからそんなことが関係していたかも知れない「盲人が物を食う時はさもしそうに見え気の毒な感じを催すものであるまして妙齡みょうれいの美女の盲人においてをや春琴はそれを知つてか知らずか佐助以外の者に飲食の態を見られるのを嫌きらつた客に招かれた時などはほんの形式に箸はしを取るのみであつたから至つてお上品のように思われたけれども内実は食べ物に贅ぜいを尽つくしたもつとも大食というのではない飯は軽く二杯たべおかずも一と箸はしづついろいろの皿へ手をつけるので品数が多くなり給仕に手数のかかることは大抵でなかつたまるで佐助を困らせるのが目的のように思えるほどだった。佐助は鯛のあら煮にの身をむしること蟹かに蝦えび等の殻からを剥はぐことが上手じょうずになり鮎あゆなどは姿を崩くずさずに尾の所から骨を綺麗きれいに抜き取つた」頭髪とうはつもまた非常に多量で真綿のごとく柔くふわふわしていた手は華き車やしゃで掌てのひらがよく撓しない絃しなを扱とうせい指先さきに力があり平手で頬ほを撲うたれると相当に痛かつた。すこぶる上の気ほせ性の癖くせにまたすこぶる冷え性で盛夏せいなかといえどもかつて肌あせに汗あせを知らず足は氷このようにつめたく四季を通じて厚い袍ふきわた綿わたの這入はいつた羽二重はぶたえもしくは縮緬ちりめんの小袖こそでを寝

間着に用い裾を長く曳いたまま着て両足を十分に包んで寝ねそれで少しも寝姿が乱れなかつた。上気することを恐れるためなるべく炬燵や湯たんぽを用いず余り冷えると佐助が両足を懐に抱いて温めたがそれでも容易に温もらず佐助の胸がかえって冷え切ってしまうのであつた入浴の時は湯殿に湯気が籠らぬように冬でも窓を開け放ち微温湯に一二分間ずつ何回にも漬かるようにした長湯をすると直きに動悸がして湯気に上りそうになるので出来るだけ短時間に煖まり大急ぎで体を洗わねばならぬかくのごときことを知れば知るほど佐助の労苦真に察すべしである。しかも物質的に報いられる所は甚だ薄く給料等も時々の手当てに過ぎず煙草錢にも窮することがあり衣類は盆暮れに仕着せを貰うだけであつた師匠の代稽古はするけれども特別の地位は認められず門弟や女中共は彼を「佐助どん」と呼ぶように命ぜられ出稽古の供をする時は玄関先で待たされた。ある時佐助齧歯を病み右の頬が夥しく脹れ上り夜に入ってから苦痛堪え難きほどであつたのを強いて咏えて色に表わさず折々そつと合嗽をして息がかからぬように注意しながら仕えているとやがて春琴は寢床に這入つて肩を揉め腰をさすれと云う云われるままにしばらく按摩していてもうよいから足を温めよと云う畏まつて裾の方に横臥し懐を開いて彼女の蹠を我が胸板の上に載せたが胸が氷のごとく冷えるのに反し顔は寢床のいきれのためにかっかつと火照つて歯痛が

いよいよ激はげしくなるのに溜たまりかね、胸の代りに脹れた頬を蹠はへあてて辛からうじて凌しのいでいる
 とたちまち春琴がいやと云うほどその頬を蹴けつたので佐助は覺えずあつと云つて飛び上つ
 た。すると春琴が曰いわくもう温めてくれぬでもよい胸で温めよとは云うたが顔で温めよとは
 云わなんだ蹠なんじに眼のなきことは眼明きも盲人も変りはないに何とて人を欺あざむかんとはするぞ
 汝なんじが齒を病んでいるらしきは大方昼間の様子にても知れたりかつ右の頬と左の頬と熱も違
 えば脹れ加減も違うことは蹠なんじにてもよく分るなりさほど若しくば正直に云うたらよろしか
 らん妾とても召めしつかい使いを勞いたわる道を知らざるにあらずしかるにいかにも忠義らしく装いな
 がら主人の体をもつて齒を冷やすとは大それた横おうちやくもの着く者ものかなその心底憎にくさも憎しと。春
 琴の佐助を遇ぐうすることとおおよそこの類であつた分けても彼が年若い女弟子に親切にしたり
 稽古してやつたりするのを憚よろこばずたまたまそういう疑いがあると嫉妬しつとを露骨ろこつに表わさない
 だけ一層意地の悪い当り方をしたそんな場合に佐助は最も苦しめられた

○

女で盲目で独身であれば贅ぜいたく沢たくと云つても限度があり美衣美食をほしいままにしてもたか

が知れているしかし春琴の家には主一人に奉公人が五六人も使われている月々の生活費も生やさしい額ではなかつたなぜそんなに金や人手がかかつたと云うとその第一の原因は小鳥道楽にあつたなかならず彼女を愛した。今日啼きごえの優れた鶯は一羽一万円もするのがある往時といえども事情は同じだつたであらう。もつとも今日と昔とでは啼きごえの聴き分け方や翫賞法が幾分異なるらしいけれどもまず今日の例をもつて話せばケツキヨ、ケツキヨ、ケツキヨケツキヨと啼くいわゆる谷渡りの声ホーキベカコンと啼くいわゆる高音、ホーキケキヨウの地声の外にこの二種類の啼き方をするのが値打ちなのであるこれは藪鶯では啼かないたまたま啼いてもホーキベカコンと啼かずにホーキベチャと啼くから汚い、ベカコンと、コンと云う金属性の美しい余韻を曳くようにするにはある人為的な手段をもつて養成するそれは藪鶯の雛を、まだ尾の生えぬ時に生け捕つて来て別な師匠の鶯に附けて稽古させるのである尾が生えてからだと親の藪鶯の汚い声を覚えてしまうのではや矯正することが出来ない。師匠の鶯も元来そう云う風にして人為的に仕込まれた鶯であり有名なものは「鳳凰」とか「千代の友」とか云つた様にそれぞれ銘を持つているさればどこの誰氏の家にはしかじかの名鳥がいると云うことになれば鶯を飼っている者は我が鶯のために遥々とその名鳥の許を訪ね啼き方を教えてもらうこの

稽古を声を附けに行くと言い、大抵早朝に出かけて幾日も続ける。時には師匠の鶯の方から一定の場所に出張し弟子の鶯共がその周囲に集まりあたかも唱歌の教室のごとき観を呈するももちろん箇々の鶯によつて素質の優劣声の美醜があり、同じ谷渡りや高音にも節廻しの上手下手余韻の長短等さまさまであるから良き鶯を獲ることは容易にあらざる獲れば授業料の儲けがあるので価の高いのは当然である。春琴は我が家に飼っている一番優秀な鶯に「天鼓」と云う銘をつけて朝夕その声を聴くのを楽しんで天鼓の啼く音は実に見事であつた高音のコンという音の冴えて余韻のあることは人工の極致を尽した楽器のようで鳥の声とは思われなかつたそれに声の寸が長く張りもあればつやもあつたされば天鼓の取り扱いは甚だ鄭重で食物のごときも注意に注意を加えさせた普通鶯の擦り餌を作るには大豆と玄米を炒つて粉にした物へ糠を交えて白粉を製し、別に鮒や鮓の干したのを粉にした鮒粉と云うものを用意してこの二つを半々に混じ大根の葉を擦つた汁で溶くかなか面倒なものであるその外声をよくするためには、という蔓草の茎の中に巢食う昆虫を捕つて来て日に一匹あるいは二匹宛与えるかくのごとき手数を要する鳥を大概五六羽は飼育していたので奉公人の一人か二人はいつもそれに係りきりであつた。また鶯は人の見ている前では啼かない籠を飼桶という桐の箱に入れ障子を箦めて密閉し紙

の外からほんのり明りがさすようにするこの飼桶の障子には紫檀黒檀などを用いて精巧な彫刻を施したりあるいは蝶貝を鏤め蒔絵を描いたりして趣向を凝らし中には骨董品などもあつて今日でも百円二百円五百円などと云う高価なのが珍しくない天鼓の飼桶には支那から舶載したという逸品が箆まつていた骨は紫檀で作られ腰に琅玕の翡翠の板が入れてありそれへ細々と山水楼閣の彫りがしてあつた誠に高雅なものであつた。春琴は常に我が居間の床脇の窓の所にこの箱を据えて聴き入り天鼓の美しい声が響る時は機嫌がよかつた故に奉公人共は精々水をかけてやり啼かせるようにした大抵快晴の日の方がよく啼くので天氣の悪い日は従つて春琴も氣むずかしくなつた天鼓の啼くのは冬の末より春にかけてが最も頻繁で夏に至ると追い追ひ回数が少くなり春琴も次第に鬱々とする日が多かつた。いつたい鶯は上手に飼えば寿命が長いものだけけれどもそれには細心の注意が肝要で経験のない者に任せたら直き死んでしまふ死ねばまた代りの鶯を買う春琴の家でも初代の天鼓は八歳の時に死しその後しばらく二代目を継ぐ名鳥を得られなかつたが、数年を経てようやく先代を恥かしめぬ鶯を養成しこれを再び天鼓と名づけて愛翫した「二代目の天鼓もまたその声霊妙にして迦陵頻迦を欺きければ日夕籠を座右に置いて鍾愛すること大方ならず、常に門弟等をしてこの鳥の啼く音に耳を傾けし

め、しかる後に論して曰く、汝等天鼓の唄うを聴け、元来は名もなき鳥の雛なれども幼少
 より練磨の功空しからずしてその声の美なること全く野生の鶯と異れり、人あるいは云わ
 ん、かくのごときは人工の美にして天然の美にあらず、谷深き山路に春を訪ね花を探り
 て歩く時流れを隔つる霞の奥に思いも寄らず啼き出でたる藪鶯の声の風雅なるに如かずと、
 しかれども妾は左様には思わず、藪鶯は時と所を得て始めて雅致あるように聞ゆるなり、
 その声を論ずれば未だ美なりと云う可からず、これに反して天鼓のごとき名鳥の囀るを聞
 けば、居ながらにして幽邃閑寂なる山峡の風趣を偲び、溪流の響の潺湲
 たるも尾の上の桜の靨黠たるもことごとく心眼心耳に浮び来り、花も霞もその声の裡に
 備わりて身は紅塵万丈の都門にあるを忘るべし、これ技工をもつて天然の風景とその
 徳を争うものなり音曲の秘訣もここに在りと。また鈍根の子弟を恥じしめて、小
 禽といえども芸道の秘事を解するにあらずや汝人間に生れながら鳥類にも劣れりと叱咤
 することしばしばなりき」なるほど理窟はその通りであるが何かにつけて鶯に比較されて
 は佐助を始め門弟一同やりきれなかつたことであろう

鶯に次いで愛したものは雲雀ひばりであつたこの鳥は天に向つて飛揚ひようせんとする習性があり籠の裡うちにあつても常に高く舞まい上るので籠の形も縦たてに細長く造り三尺四尺五尺と云うような丈に達する。しかれども雲雀の声を真に賞美するには籠より放つてその姿の見えずなるまで空中に舞い上らせ、雲の奥深く分け入りながら啼く声を地上にあつて聞くのであるすなわち雲切りの技を楽しむ。大抵雲雀は一定時間空中に留まつた後再び元の籠へ舞まい戻もどつて来る空中に留まつている時間は十分ないし二三分であり長く留まつているほど優秀な雲雀であるとされる故に雲雀の競技会の際には籠を一行に並べて置き同時に戸を開いて空へ放ちやり最後に戻つて来たものを勝かちとする。劣れつとう等の雲雀は戻つて来る時誤あやまつて隣となりの籠へ這入つたり甚しきは一丁も二丁も離れた所へ下りたりするが普通ふつうはちゃんと自分の籠わきまを弁えていけるけだし雲雀は垂すい直ちよくに舞い上り空中の一箇所に留まつていて再び垂直に降下するのであるされば自然と元の籠へ戻るようになる雲切りとは云うけれども雲を切つて横に飛ぶのではない雲を切るように見えるのは雲の方が雲雀を掠かすめて飛ぶためである。淀屋橋筋の春琴の家の隣近所かきよに家居する者はうらかな春の日に盲目の女師匠が物干台に立ち出でて雲雀を空に揚あげているのを見かけることが珍めづしくなかつた彼女の傍かたわらにはいつも佐助が

侍り外はべに鳥籠ほかの世話をする女中が一人附ついていた女師匠が命ずると女中が籠の戸を開ける
 雲雀は嬉々ききとしてツンツン啼きながら高く高く昇のぼつて行き姿を霞かすみの中に没ぼつする女師匠は見
 えぬ眼を上げて鳥影とりかげを追いつつやがて雲の間から啼きしきる声が落ちて来るのを一心に
 聴きき惚ほれてゐる時には同好の人々がめいめい自慢じまんの雲雀を持ち寄つて競技に興じているこ
 ともある。そういう折に隣近所の人々も自分たちの家の物干に上つて雲雀の声を聴かせて
 もらう中には雲雀よりも別嬪べっぴんの女師匠の顔を見たがる手合もある町内の若い衆などは年
 中見馴みなれているはずだのに物好きな痴漢ちかんはいつの世にも絶えないもので雲雀の音が聞える
 とそれ女師匠が拝めるぞとばかり急いで屋根へ上つて行つた彼等らがそんなに騒いだのは盲
 目というところに特別の魅みりよく力と深みを感じ、好奇心をそそられたのであろう平素佐助に
 手を曳かれて出稽古おもむに赴く時は黙々としてむずかしい表情をしているのに、雲雀を揚げる
 時は晴れやかに微笑ほほえんだり物を云つたりする様子なので美貌びぼうが生き生きと見えたのでもあ
 ろうか。まだこの外ほかにも駒鳥こまどり鸚鵡おうむ目白ほおしろ頬ほお白などを飼つたことがあり時によつていろい
 ろな鳥を五羽も六羽も養つていたそれらの費用は大抵でなかつたのである

彼女はいわゆる内一面の悪い方であつた外に出ると思ひの外愛想がよく客に招かれた時などは言語動作が至つてしとやかで色気があり家庭で佐助をいじめたり弟子を打つたり罵つたりする婦人とは受け取りかねる風情があつたまた附き合ひのためには見えを飾り派手喜び祝儀無祝儀盆暮れの贈答等には鴟屋の娘たる格式をもつてなかなかの気前を見せ、下男下女おちやこ駕籠昇き人力車夫等への纏頭にも思ひ切つた額を弾んだ。だがそれならば無鉄砲な浪費家であつたかと云うのに、断じてそうではなかつたらしいかつて作者は「私の見た大阪及び大阪人」と題する篇中に大阪人のつましい生活振りを論じ東京人の贅沢には裏も表もないけれども大阪人はいかに派手好きのように見えても必ず人の気の付かぬ所で冗費を節し締括りを附けていることを説いたが春琴も道修町の町家の生れであるとしてその辺にぬかりがあるや極端に奢侈を好む一面極端に吝嗇で慾張りであつた。もともと派手を競うのは持ち前の負けじ魂に発しているのでその目的に添わぬ限りは妄りに浪費することなくいわゆる死に金を使わなかつた氣紛れにぱつぱつと播き散らすのでなく使途を考え効果を狙つたのであるその点は理性的打算的であつたさればある場合には負けじ魂がかえつて貪慾に変形し門弟より徴する月謝やお膝付のごとき、

女の身としておおよそ他の師匠連との振り合いもあるべきに自ら恃じすることすこぶる高く一流の検校と同等の額を要求して譲ゆずらなかつた。そのくらいはまだよいとして弟子共が持つて来る中元や歳暮せいぼの付け届け等にまで干渉かんしやうし少しでも多いことを希望して暗々あんあん裡りにその意を諷ふうすること執拗しつようを極めたある時盲人の弟子があり家貧しき故に月々の謝礼も滞とどこりがちであつたが中元に付け届けをすることが出来ず心ばかりに白仙羹はくせんこうをひと折買つて来て情を佐助に訴え、なにとぞ私の貧を憐あわれみお師匠様にそこをよろしくお執成とりなし下されお目こぼしを願ねが度いたしと云つた。佐助も氣の毒に思い恐る恐るその旨むねを取り次いで陳弁ちんべんするとにわかには顔の色を変えて月謝や付け届けをやかましく云うのを慾張りのように思うか知れぬがそんな訳ではない錢金はどうでもよけれど大体の目安を定めて置かなんたら師弟の礼儀というものが成り立たぬ、あの子は毎月の謝礼をさえ怠おこたり今また白仙羹ひと折を中元と称して持参するとは無礼の至り師匠を蔑ないがしろにすると云われても仕方がなからう、せつかなくながらそれほど貧しくては芸道の上達も覺おぼつか束つかないもちろん事と品によつては無報むほう酬ゆうにて教えてやらぬものでもないがそれは行く末に望みもあり万人に才を惜おしまれるような麒麟児きりんじに限つたこと、貧苦に打ち克かちひと廉かどの名人となる程の者は生れつきから違つてゐるはず根こんと熱心とばかりでは行かぬあの子は厚かましいだけが取柄とりえで芸の方はさして

見込みがあろうとも思えず貧を憐んで下されなどは己惚れも甚しい、なまじ人に迷惑をかけ恥を曝すよりもこの道で立つことをふつつりあきらめたがよからう、それでも習いたいのなら大阪には幾らもよい師匠があるどこへなと勝手に弟子入りをしや私の所は今日限り止めてもらいますこちらから断りますと、云い出したからはいかに詫び入っても聴き入れずとうとう本当にその弟子を断ってしまった。また余分の付け届けを持って行くとさしも稽古の嚴重な彼女もその日一日はその子に対して顔色を和げ心にもない褒め言葉を吐いたりするので聞く方が氣味を悪がりお師匠さんのお世辞と云うと恐ろしいものになっていた。そんな次第故諸方からの到来物は一々自ら吟味して菓子かしの折まで開けて調べるという風で月々の収入支出等も佐助を呼びつけて珠算盤そろばんを置かせ決算を明かにした彼女は非常に計数に敏く暗算が達者であり一度聞いた数字は容易に忘れず米屋の払いがいくくらから酒屋の払いがいくくらと二月三月前ふたつきみつきのことまで正確に覚えていた。畢竟彼女の贅沢は甚だしく利己的なもので自分が奢りに耽るだけどこかで差引をつけなければならぬ結局お鉢は奉公人に廻つた。彼女の家庭では彼女一人が大名のような生活をし佐助以下の召使は極度の節約を強いられるため爪に火を燈すようにして暮らしたその日その日の飯の減り方まで多いの少いのと云うので食事も十分には摂れなかつたくらいであった奉公人は

陰かげぐち口くちをきいて、お師匠様は鶯や雲雀の方がお前等らより忠義者だと仰おほつしやるが忠義なのも無理がない、私等よりも鳥の方がずっと大事にされていると云った

○

鴟もずや屋の家でも父の安左衛門が生存中は月々春琴の云うがままに仕送ったけれども父親が死んで兄が家督かどくを継いでからはそうそう云うなりにもならなかった。今日でこそ有ゆう閑かん婦人の贅ぜい沢はさまで珍しくないようなものの昔は男子でもそうは行かぬ裕ゆう福ふくな家でも堅かたぎ儀ぎな旧家ほど衣食住の奢おごりを慎つつしみ儻せん上しょうの誹そしりを受けられないようにし成り上り者に伍ごするのを嫌きらった春琴に奢侈しゃしを許したのは外ほかに楽しみのない不具の身を憐あはれんだ親の情であつたのだが、兄の代になるとかくの批難ひなんが出て最大限度月に幾いくばく何と額をきめられそれ以上の請求には応じてくれないようになった彼女の吝嗇しんさくもそういう事が多分に関係しているらしい。しかしなおかつ生活を支えて余りある金額であつたから琴曲の教授などはどうでもよかつたに違ちがいなく弟子に対して鼻息の荒かつたのも当然である。事実春琴の門かたを叩たたく者は幾人とも数えるほどで寂々じやくじやくりようりよう寥々れうれうりようたるものであつたさればこそ小鳥道楽などに耽かつてい

る暇ひまがあつたのである。ただし春琴が生田流の琴においても三絃においても当時大阪第一流の名手であつたことは決して彼女の自負のみにあらず公平な者は皆認めていた。春琴の傲ごうま慢まんを憎む者といえども心中私ひそかにその技わざを妬そねみあるいは恐れていたのである。作者の知っている老芸人に青年の頃彼女こころの三絃をしばしば聴いたという者があるもつともこの人は淨じゆんりの三味線弾きで流儀は自ら違うけれども近年地唄の三味線で春琴のごとき微妙びみょうの音を弄ろうするものを他に聴いたことがないと云う。また団平が若い頃にかつて春琴の演奏を聞き、あわれこの人男子と生れて太棹ふとざおを弾きたらんには天晴あつぱれの名人たらんものと嘆たんじたという。団平の意太棹は三絃芸術の極致にしてしかも男子にあらざればついに奥義おうぎを究むる能あたわず。たまたま春琴の天稟てんびんをもつて女子に生れたのを惜おしんだのであろうか、そもそもまた春琴の三絃が男性的であつたのに感じたのであろうか。前掲ぜんけいの老芸人の話では春琴の三味線を蔭で聞いていると音締ねじめが冴さえていて男が弾いているように思えた。音色も単に美しいのみではなくて変化に富み時には沈痛ちんつうな深みのある音を出したといういかさま女子には珍しい妙手であつたらしい。もし春琴が今少し如じよさい才さいなく人に謙へりくだることを知っていたなら大いにその名が顕あらわれたであろう。に富貴ふうきに育つて生計の苦難を解せず、氣随きずい氣儘きまに振舞ふるまつたために世間から敬遠され、その才の故にかえつて四方に敵を作り空むなしく埋うもれ果てたのは

自業自得ではあるけれどもまことに不幸と云わねばならぬ。されば春琴の門に入る者はかねてより彼女の實力に服しこの人を措おいて師と頼む者はないと云う風に思い詰め、修業のために甘あまんじて苛からつ辣べんたつな鞭撻を受けよう怒罵どばも打ちようちやく擲ちやくも辞する所にあらずという覚悟かくごの上で来たのであったがそれでも長く堪たえ忍しのんだ者は少く大抵は辛抱しんぼう出来ずにしまった素人などはひと月と続かなかつた。按あんずるに春琴の稽古振りが鞭撻の域いきを通り越こして往々意地の悪い折檻せつかんに発展し嗜虐しぎやく的色彩しきさいをまで帯びるに至つたのは幾分か名人意識も手伝つていたのであろうすなわちそれを世間も許し門弟も覚悟していたのでそうすればするほど名人になつたような気がし、だんだん凶に乗つてついに自分を制しきれなくなつたのである



鳴沢しぎさわてる女はいう、お弟子さんはほんに少うござりましたが中にはお師匠さんのご器量が目あてで習いに来られるお人もござりました、素人衆は大概そんなのが多かつたようでござりますと。美貌で未婚でかつ資産家の娘であつたからこれはいかにもありそうに思わ

れる彼女が弟子を遇ぐうすること峻しゅん烈れつであったのはそういう冷やかし半分おおかみの狼連おおかみを撃退げきたいする手段でもあつたと云うが皮肉にもそれがかえつて人気を呼んだらしくもある邪推じゃすいをすれば真面目まじめな玄くろうと人の門弟の中にも盲目の美女しもとの筈しもとに不思議な快感を味わいつつ芸の修業よりもその方に惹ひき付けられていた者が絶無ではなかつたであろう幾人かはジャン・ジヤック・ルーソーがいたであろう今や春琴の身に降りかかった第二の災難じよを叙するに際し伝にも明めい瞭りょうな記載きざいを避けてあるためにその原因や加害者を判然と指摘してきし得ないのが残念であるが、恐らく上記のごとき事情で門弟の何者かに深刻な恨うらみを買かいその復讐ふくしゅうを受けたと見るのが最も当っているようである。ここに考えられることは土佐堀とさぼりの雑穀商ざつこく美濃屋九兵衛みのやきゆうべえの倅せがれに利太郎と云うぼんちがあつたなかなかの放蕩ほうとう者ものでかねてより遊芸ゆうげい自慢であつたがいつの頃よりか春琴の門に入って琴三味線を習まなつていたこの者親しんだいの身代みしろを鼻はなにかけどこへ行つても若旦那わかだんなで通るのをよい事にして威張いばる癖くせがあり同門の子弟しんじを店の番頭手代並ばんとうてだいなみに心得こころえ見下す風があつたので春琴も心中面白くなかつたけれども、こは例の附け届けを十分にたつぷり薬を利きかしてあるので断りもならず精々じよさい如才あつかなく扱あつかつていた。しかるにさすがのお師匠おしせうさんも己おれには一目置いちもくいているなどと云い触ふらし殊ことに佐助を輕蔑けいべつして彼の代稽古だいきこを嫌いお師匠おしせうさんの教授でなければ治まらずだんだん増長ぞうちやうす

る様子に春琴も癩癬かんぺきを募つらせていたところ父親九兵衛が老後の用意てんがぢややに天下茶屋かんせいの閑静かんせいな場所を選び葛家葺くずやぶきの隠居いんきよじよ所を建て十数株の梅うめの古木を庭園に取り込んであったが、ある年の如月きさらぎにここで梅見の宴うたげもよおを催し、春琴を招いたことがあった。総大将は若旦那の利太郎それに幫間ほうかん芸者等の末社まつしやが加わり春琴には佐助が附き添って行ったこと云うまでもない佐助はその日利太郎始め末社からちよいちよい杯さかずきをさされるので大いに当惑とうわくした近頃師匠の晩酌の相手をして少しばかり手が上ったけれども余り行ける口でなかつたしよそへ行つては師匠の許可がない限り一滴てきといえども飲むことを禁ぜられていたし酔よつては肝腎かんじんの手曳きの役が忽こつしよ諸になるから飲む真似をして胡麻化ごまかしているのを利太郎が眼敏めざとく見つけ、お師匠はん、お師匠はんのお許しが出な佐助どん飲みやはれしまへん今日は梅見だつしやないかいな一日位ゆつくりさしたげなはれ佐助どんがへたばつたかて手曳きになりたがつてる者がそこらに二人や三人いまんねと胴間声どうまごえで絡からんで来るので苦笑いしながらまあまあ少しはようござります余り酔わさんようにしてやって下されと程よくあしらうとさあお許しが出たとばかりにあちらからもこちらからもさすそれでもきつと引き締めて七分通りは盃洗はいせんに飲ました。その日一座に連なつた幫間ほうかんも芸者もかねて聞き及んだ高名の女師匠を眼のあたりに見噂うわさに違わぬ姥うばざくら桜さくらの艶あですがた姿きいんと気韻おどろとに驚かぬ者なく口

々に褒めそやしたというそれは利太郎の胸中を察し歓心を買わんがためのお世辞でもあつたであろうが当時三十七歳の春琴は実際よりもたしかに十は若く見え色あくまで白くして襟えりもと二元などは見ている者がぞくぞくと寒気がするように覚えた甲こうの色のつやつやとした小さな手をつつましく膝ひざに置いて俯うつむ向き加減かへんにしている盲目かおのあでやかさは一座の瞳ひとみをことごとく惹ひき寄よせて恍惚こうこうたらしめたのであつた。滑稽こつげいなことは皆みなが庭園へ出て遣しやう遥ようした時佐助は春琴を梅花の間に導まいてそりそり歩かせながら「ほれ、ここにも梅うめがござります」と一々老木の前に立ち止まり手を把とつて幹みきを撫なでさせたおよそ盲人しやうは觸ふ覚かくをもつて物の存在しんざいを確かめなければ得心とくしんしないものであるから、花木なぐの眺ながめを賞あづかるにもそんな風にする習慣しんぐわんがついていたのであるが、春琴の織せんしゆ手てが佶屈きつくつした老梅の幹かんをしきりに撫なで廻まわす様子ようすを見るや「ああ梅の樹きうちやまが羨うらやましい」と一翳間きせいが奇声きせいを発はつたと今一人の翳間きせいが春琴の前に立ち塞ふさがり「わたい梅の樹うめだつせ」と道化どうけた恰かつ好こうをして疎影そえい横斜うしやの態ていを為なしたので一同いどうがどつと笑い崩くずれた。これらは一種いっしゆの愛嬌あいけうであつて春琴を讚たえる意味いみにこそなれ悔あなむる心こころではなかつたけれども遊里あそびの悪洒落わるじやれに馴なれない春琴は余あまりよい気持きもちがしなかつたいつも眼明あなきと同等どうとうに待遇たいぐうされることを欲ほし差別さべつされるのを嫌きらつたのでこう云いう冗談じやうだんは何なによりも癩かんに触ふつた。やがて夜よに入り座敷ざしきを変かえて再び宴うたげを開ひらいた時

佐助どんあんたも疲れはつたやろお師匠はんはわいが預かる、あつちに支度したあるさか
 い一杯やつて来とくなはれと云われるままに、無闇に酒を強いられぬうち腹を拵えて置く
 に如かずと佐助は別室へ引き退つて先に夕飯の馳走を受けたが御飯を戴きますというのを
 銚子を持った老妓の一人がべつたり着き切りでまあお一つまあお一つと重ねさせるお蔭
 で思いの外時間を潰したが食事を済ませてもしばらく呼びに来ないのでそこに控えていた
 間に座敷の方でどういふ事があつたのか、佐助を呼んで下されと云うのを無理に遮り手
 水ならばわいが附いて行つたげると廊下へ連れて出て手を握つたか何かであろう、いえ
 いえやはり佐助を呼んで下されと強情に手を振り払つてそのまま立ちすくんでいる所へ佐
 助が駈け付け、顔色でそれと察した。しかし結局こんな事から出入りをしなくなつてくれ
 たらいい塩梅だと思つていたのに色男を台無しにされては素直にあきらめきれなかつた
 ものかまた明くる日からずうずうしくも平気で稽古にやつて来たのでそれならば本気で叩
 き込んでやる真剣の修業に堪えるなら堪えてみよとにわか態度を改めてピシピシと教え
 た。そうなると利太郎は面喰つて毎日三斗の汗を流しふうふう云い出した元來が自分免
 許の芸でおだてられているうちはよいが意地悪く突つ込まれたらアラだらけであるそこへ
 無遠慮な怒罵が飛ぶから稽古に事寄せて隙もあらばと云うようならけた心では辛抱

しきれず次第に横着になりいくら熱心に教えてもわざと気のない弾き方をするついに春琴は「阿呆」と云いさま撥をもつて打つた弾みに眉間の皮を破ったので利太郎は「あ痛」と悲鳴を挙げたが、額からぼたぼた滴れる血を押し拭い「覚えてなはれ」と捨台辞を残して憤然と座を立ちそれきり姿を見せなかつた

○

一説に春琴に危害を加えた者は北の新地辺に住む某少女の父親ではなかつたかというこの少女は芸者の下地ツ子であつたからみつちり仕込んでもらう積りで稽古の辛さを慄えつつ春琴の門に通つていたところある日撥で頭を打たれ泣いて家へ逃げ帰つたその傷痕が生え際に残つたので当人よりも親父がカンカンに腹を立てて捻じ込んだ多分養父ではない実父だったのであろう何ほ修行だからと云つて年齒も行かぬ女の子を苛むにも程がある、売り物の顔に疵をつけられこのままでは済まされないのでしてくると大分過激な言辞を使ったので持ち前の聴かぬ気を出し妾の所は躰が厳しいので通つていてそのくらいなら何で稽古に超越しなかつたのかと逆捻じの挨拶をしたすると親父も負けてはいず打つのも

殴るのもよいが眼の見えぬお人のすることは危険だどこへどんな怪我をさせるかも知れぬ
 盲人は盲人らしく殊勝にせよと、出様によつては暴力にも訴えかねまじき気味合なの
 で佐助が割つて這入りようその場を預かつて帰した春琴は真つ青になつて慄え上り沈
 黙してしまつたが最後まで謝罪の言葉を吐かなかつたこの父親が娘の器量を損ぜられた
 仕返しに春琴の容貌に悪戯を加えたという。しかし生え際と云つても額の真中か耳の
 うしろかどこかにちよつぴり痕が附いたぐらいを根に持つて一生相好が変るほどの凄じ
 い危害を与えたと云うのは我が子としきに取り上気せた親心にしても余り復讐が執
 拗に過ぎる第一相手は盲人であるから美貌を醜貌に変ぜしめても当人にはそれほど
 打撃にはならないもし春琴のみを目的とするなら他にもつと痛快な方法もあろう。察する
 所復讐者の意図は春琴を苦しめるに止まらず春琴以上に佐助を悲嘆せしめようとした
 のではないかそれはまた結果において最も春琴を苦しめることになるのであるかく考えれ
 ば前掲の少女の父親よりも利太郎を疑う方が順当のように思われるがいかにか。利太郎の
 横恋慕にどの程度の熱意があつたか知るべくもないが若年の頃は誰しも年下の女より年
 増女の美に憧れる恐らく極道の果てのああでもないこうでもないが昂じたあげく盲目の美
 女に蠱惑を感じたのであろう最初は一時の物好きで手を出したとしても肘鉄砲を食わさ

れた上に男の眉間まで割られれば随分しょうわる性悪な意趣晴らしをしないものでもない。だが何分にも敵の多い春琴であつたからまだこの外ほかにもどんな人間がどんな理由で恨うらみを抱いだいていたかも知れず一いちがい概に利太郎であるとは断定し難いまた必ずしも痴情ちじょうの沙汰さたではなかつたかも知れない金銭上の問題にしても、前に挙げた貧しい盲人の弟子のような残酷ざんこくな目に遭あつた者は一人や二人ではなかつたというまた利太郎ほど厚かましくはないにしても佐助を嫉妬あしていた者は何人もあつたという佐助が一種奇妙な位置にある「手曳き」であつたことは長い間には隠かくし切れず門弟中に知れ渡つていたから、春琴に思いを寄せる者は私ひそかに佐助の幸福を羨うらやみある場合には彼のまめまめしい奉公振りに反感を抱いだいていたのである。正式の夫であるならあるいはせめて情夫としての待たい遇ぐうを受けているなら文句の出どころはなかつたけれども表面はどこまでも手曳きであり奉公人であり按摩あんまから三さん介すけの役まで勤めて春琴の身の周りの事は一切取りしきり忠実一方の人間らしく振舞ふるまっているのを見ては、裏面りめんの消息を解する者には片腹痛く思えたでもあろうああ云う手曳きならちつとやそつと辛いことがあつても己おれだつて勤める感心するには当らぬと嘲あざける者も少くなかつた。されば佐助に憎しみをかけ春琴の美貌みせうが一いち朝ちよう恐ろしい変化を来たしたらあいつがどんな面つらをするかそれでも神妙にあの世話の焼ける奉公を仕し遂とげるだろうかそれが見物みもの

だと云う全くの敵本主義からでも決行しないと限らない。要するに臆説紛々として
 いずれが真相やら判定し難いがここに全然意外な方面に疑いをかけようとする有力な一説
 があつて曰く、恐らく加害者は門弟ではあるまい春琴の商売敵である某検校か某女師匠で
 であろうと。別に証拠はないけれどもあるいはこれが最も穿つた観察であるかも知れないけ
 だし春琴が居常傲岸にして芸道にかけては自ら第一人者をもって任じ世間もそれを認め
 る傾向があつたことは同業の師匠連の自尊心を傷け時には脅威ともなつたであろう検校
 と云えば昔は京都より盲人の男子に下される一つの立派な「位」であつて特別の衣服と乗
 物を許され 尋常 芸人の輩とは世間の待遇も違つていたのに、そう云う人が春琴の技
 に及ばないと云う噂を立てられては盲人であるだけに根強い意趣を含んだでもあろうし何
 とかして彼女の技術と評判とを葬り去る陰險な手段をも考えたであろうよく芸の上の嫉妬
 から水銀を飲ましたと云う例を聞くが春琴の場合は声楽と器楽と両方であつたから彼女の
 見え坊と器量自慢とに附け込み再び公衆の面前へ出られぬように相を変えさせたと云うの
 である。もし加害者が某検校にあらずして某女師匠であつたとすれば器量自慢までが面
 憎かつたに違いないから彼女の美貌を破壊し去ることに一層の快味を覚えたであろう。
 かく色々疑い得らるる原因を数えて来れば早晩春琴に必ず誰かが手を下さなければ済ま

ない状態にあつたことを察すべく彼女は不知不識の裡に禍の種を八方へ蒔いていたのである。

○

前記天下茶屋の梅見の宴の後約一箇月半を経た三月晦日の夜八時半時頃すなわち午前三時々分に「佐助は春琴の苦吟する声に驚き眼覚めて次の間より馳せ付け、急ぎ燈火を点じて見れば、何者か雨戸を扶け開け春琴が伏戸に忍入りしに、早くも佐助が起き出でたるけはいを察し、一物をも得ずして逃げ失せぬと覺しく、すでに四辺に人影もなかりき。この時賊は周章の余り、有り合わせたる鉄瓶を春琴の頭上に投げ付けて去りしかば、雪を欺く豊頬に熱湯の余沫飛び散りて口惜しくも一点火傷の痕を留めぬ。素より白壁の微瑕に過ぎずして昔ながらの花顔玉容は依然として変らざりしかども、それより以後春琴は我が面上の些細なる傷を恥ずること甚しく、常に縮緬の頭巾をもつて顔を覆い、終日一室に籠居してかつて人前に出でざりしかば、親しき親族門弟といえどもその相貌を窺い知り難く、為めに種々なる風聞臆説を生むに至りぬ」と云うのが春琴伝の記載で

ある。伝は続けて曰く「けだし負傷は輕微けいびにして天稟てんびんの美貌をほとんど損ずることなかりき。その人に面接するを厭いといたるは彼女が潔癖けつぺきの致すところにして、取るにも足らぬ傷痕を恥辱ちじよくのごとく考えしは盲人の思い過しとや云わん」と。更にまた曰く「しかるにいかなる因縁いんねんにや、それより数十日を経て佐助もまた白内障を煩わづらい、たちまち両眼暗黒となりぬ。佐助は我が眼前朦朧もうろうとして物の形の次第しだいに見え分かずなり行きし時、俄盲にわかめ目くらの怪あやしげなる足取りにて春琴の前に至り、狂喜きょうきして叫さけんで曰く、師よ、佐助は失明いた致したり、もはや一生お師匠様のお顔の瑕きずを見ずに済むなり、まことによき時に盲目そうろうとなり候ものかな、これ必ず天意にて侍はべらんと。春琴これを聴ききて慥然ぶぜんたることやや久し矣」と。佐助が衷情ちゆうじようを思いやれば事の真相まかを発あばくのに忍しのびないけれどもこの前後の伝の叙じ述よじゆつは故意に曲筆まがしているものと見る外ほかはない彼が偶然白内障になつたと云うのも腑ふに落ちないしまた春琴がいかに潔癖けつぺきでありいかに盲人の思い過しであろうとも天稟てんびんの美貌を損じなかつた程度の火傷であるならば何をもつて頭巾で面体を包んだり人に接するのを厭いとつたりしようぞ事實は花顔玉容に無残な変化を来したのである。鳴沢しぎさわてる女その他二三の人の話によると賊そくはあらかじめ台所に忍しのび込こんで火を起し湯を沸わかした後、その鉄瓶を提さげて伏戸ちんにゆうに闖ちんにゆう入し鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾かたむけて真正面に熱湯を注まぎかけたので

あると云う最初からそれが目的だったので普通の物盗りでもなければ狼狽の余りの所為でもないその夜春琴は全く気を失い、翌朝に至って正氣付いたが焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに二箇月以上を要したなかなかの重傷だったのである。されば物凄い相貌の変り方について種々奇怪なる噂が立ち毛髪が剥落して左半分が禿げ頭になっていたと云うような風聞も根のない臆説とのみ排し去る訳には行かない佐助はそれ以来失明したから見ずに済んだでもあろうけれども、「親しき親族門弟といえどもその相貌を窺い知り難」かつたと云うのはいかがであろうか絶対に何人にも見せないようにすることは不可能であろうし現に鳴沢てる女のごときも見ていないはずはないのである。ただしてる女も佐助の志を重んじ決して春琴の容貌の秘密を人に語らない私も一往は尋ねてみたが佐助さんはお師匠様を始終美しい器量のお方じやと思ひ込んでいやりましたので私もそう思うようにしておりますたと云い委しくは教えてくれなかつた

○

佐助は春琴の死後十余年を経た後に彼が失明した時のいきさつを側近者に語ったことがあ

りそれによつて 詳しやうさい細さいな当時の事情がようやく判明するに至つた。すなわち春琴が兇きやう
 漢かんに襲おそわれた夜佐助はいつものように春琴の鬮ねやの次の間に眠ねむつていたが物音を聞いて眼
 を覚ますと有明ありあけあんどん行燈あんどんの灯が消えてい真まつ暗くらな中に呻うめきごえがする佐助は驚いて跳とび起
 きまず灯をともししてその行燈あんどんを提あげたまま屏風びやうぶの向うに敷しいてある春琴の寢床ねじこの方へ
 行つたそしてぼんやりした行燈の灯影ほかげが屏風の金地に反射する覺おぼつか束たない明りの中で部屋
 の様子を見廻したけれども何も取り散らした形跡けいせきはなかつただ春琴の枕まくらもと元もとに鉄瓶
 が捨ててあり、春琴も褥じよくちゆう中ちゆうにあつて静かに仰臥ぎやうがしていたがなぜか呷うんうん々と呻うなつてい
 る佐助は最初春琴が夢ゆめに魘うなされているのだと思ひお師匠さまどうなされましたお師匠さま
 と枕元へ寄つて揺ゆり起おちそうとした時我知らずあと叫んで両眼を蔽おほつた佐助々々わては浅あさま
 しい姿にされたぞわての顔を見んとおいてと春琴もまた苦しい息の下から云い身悶みもたえしつ
 つ夢中で両手を動かし顔を隠かくそうとする様子にご安心なされませおかおは見は致あしませぬこ
 の通り眼をつぶつておりますと行燈の灯を遠のけるとそれを聞いて気が弛ゆるんだものかその
 まま人事不省じんじふせいになつた。その後も始終誰にもわての顔を見せてはならぬきつとこの事は内
 密ひそにしてと夢ゆめうつつの裡うちに譚うわごと語ことを云い続け、何のそれほどご案あんじになることがござりま
 しょう火膨ひぶくれの痕あとが直りましたらやがて元のお姿に戻かへられますと慰なぐさめればこれほどの大おおよ

火傷けいどに面体めんていの変らぬはずがあるうかそのような気休めは聞きともないそれより顔を見ぬようにしてと意識が恢かい復ふくするにつれて一層いっそう云い募りつひ、医者いしかの外ほかには佐助にさえも負傷の状態を示すことを嫌がり膏藥こうやくや繻帶ほうたいを取り替かえる時は皆病室を追い立てられた。されば佐助は当夜枕元へ駈け付けた瞬しゆんかん間焼け爛ただれた顔をひと眼見たことは見たけれども正視するに堪たえずしてとつさに面を背そむけたので燈明の灯の揺ゆめく蔭に何か人間離れのした怪あやしい幻影げんえいを見たかのような印象が残こっているに過ぎず、その後は常に繻帶の中から鼻あなの孔と口だけ出しているのを見たばかりであると云う思うに春琴が見られることを怖おそれたごとく佐助も見ることを怖れたのであつた彼は病床へ近づくと努めて眼を閉じあるいは視線を外そらすようにした故に春琴の相貌がいかなる程度に変化しつつあるかを実際に知らなかつたしまた知る機会を自ら避さけた。しかるに養生の効あつて負傷も追い追おい快方おむむに赴おもむいた頃一日病室に佐助がただ一人待坐していると佐助お前は顔を見たであろうのと突とつじよ如春琴が思い余たがつたように尋ねたいえい見ではならぬと仰おほつしやつてでござりますものを何でお言葉に違たがひましようぞと答こたえるともう近いうちに傷が癒いえたら繻帶を除けねばならぬしお医者様も来ぬようになる、そうしたら余よじん人はともかくお前にだけは顔を見られねばならぬと勝気な春琴も意地くじが挫くじけたかついぞないことに涙なみだを流し繻帶の上か

らしきりに両眼を押し拭えば佐助も諳然として云うべき言葉なく共に嗚咽するばかりであつたがようござりませぬ、必ずお顔を見ぬように致しますとご安心なさりませと何事か期する所があるように云つた。それより数日を過ぎ既に春琴も床を離れ起きているようになりいつ繃帯を取り除けても差支ない状態にまで治癒した時分ある朝早く佐助は女中部屋から下女の使う鏡台と縫針とを密かに持つて来て寢床の上に端座し鏡を見ながら我が眼の中へ針を突き刺した針を刺したら眼が見えぬようになると云う智識があつた訳ではないなるべく苦痛の少い手輕な方法で盲目になろうと思ひ試みに針をもつて左の黒眼を突いてみた黒眼を狙つて突き入れるのはむずかしいようだけれども白眼の所は堅くて針が這入らないが黒眼は柔かい二三度突くと巧い工合にずぶと二分ほど這入つたと思つたらたちまち眼球が一面に白濁し視力が失せて行くのが分つた出血も発熱もなかつた痛みもほとんど感じなかつたこれは水晶体の組織を破つたので外傷性の白内障を起したものと察せられる佐助は次に同じ方法を右の眼に施し瞬時にして両眼を潰したもつとも直後はまだぼんやりと物の形など見えていたのが十日ほどの間に完全に見えなくなつたと云う。程経て春琴が起き出でた頃手さぐりしながら奥の間に行きお師匠様私はめしになりました。もう一生涯お顔を見ることはござりませぬと彼女の前に額すいて云つた。佐助、それはほん

とうか、と春琴は一語を発し長い間黙然と沈思ちんししていた佐助はこの世に生れてから後にも先にもこの沈黙の数分間ほど楽しい時を生きることがなかった昔悪七兵衛景清あくしちびょうえんかげきよは頼朝よりとの器量に感じて復讐の念を断じもはや再びこの人の姿を見まいと誓ちかい両眼ちかを扶えぐり取つたと云うそれと動機は異なるけれどもその志の悲壯ひそうなことは同じであるそれにしても春琴が彼に求めたものはかくのごときことであつたか過日彼女が涙を流して訴えたのは、私がこんな災難さいなんに遭あつた以上お前も盲目になつて欲しいと云う意であつたかそこまでは付度くし難いけれども、佐助それはほんとうかと云つた短かい一語が佐助の耳には喜びに慄ふるえているように聞えた。そして無言で相對しつつかある間に盲人のみが持つ第六感の働きが佐助の官能に芽生えて来てただ感謝の一念より外何物ほかもない春琴の胸の中を自おのずと会得することが出来た今まで肉体の交こう渉しょうはありながら師弟の差別に隔へだてられていた心と心が始めてひしと抱だき合あひ一つに流れて行くのを感じた少年の頃押入れおしいの中の暗黒世界で三味線の稽古をした時の記憶が蘇よみがえ生えつて来たがそれとは全然心持が違つたおよそ大概な盲人は光の方向感だけは持っている故に盲人の視野はほの明るいもので暗黒世界ではないのである佐助は今こそ外界の眼を失つた代りに内界の眼が開けたのを知りあこれが本当にお師匠様の住んでいらつしやる世界なのだこれでようようお師匠様と同じ世界に住むこと

が出来たと思つたもう衰おとろえた彼の視力では部屋の様子も春琴の姿もはつきり見分けられなかつたが繻帯で包んだ顔の所在だけが、ぼうつと灰ほのしろ白く網もうまく膜に映じた彼にはそれが繻帯とは思えなかつたつい二た月前までのお師匠様の円満微妙な色白の顔が鈍にぶい明りの圈けんの中に来迎らいこうぶつ仏のごとく浮うかんだ

○

佐助痛くはなかつたかと春琴が云つたいい痛いことはござりませなんだお師匠様の大難に比べましたらこれしきのことが何でござりましようあの晚曲くせもの者が忍しのび入り辛き目をおさせ申したのを知らずに睡ねむつておりましたのは返す返すも私の不調法毎夜お次の間に寝させて戴いたくのはこう云う時の用心でござりますのにこのような大事を惹ひき起しお師匠様を苦しめて自分が無事でおりましたは何としても心が済よまず罰ばちが当つてくれたらよいと存じましてなにとぞわたくしにも災さいなん難をお授け下さりませこうしては申もうし訳わけの道が立ちませぬと御霊ごりようさま様に祈願きがんをかけ朝夕おが拝んでおりました効があつて有難や望みが叶かない今朝けさ起きましたらこの通り両眼が潰つぶれておりました定めし神様も私の志を憐あわれみ願ねがいを聞き届け

て下すつたのでござりましようお師匠様お師匠様私にはお師匠様のお変りなされたお姿は見えませぬ今も見えておりますのは三十年來眼の底に沁しみみついたあのなつかしいお顔ばかりでござりますなにとぞ今まで通りお心置きのうお側そばに使つかつて下さりませ俄にわかめくら盲目の悲しさには立ち居も儘ままならずご用を勤めますのにもたどしゆうござりましようがせめて御身の周りのお世話だけは人手を借りとうござりませぬと、春琴の顔のありかと思われる仄ほのじろ 白い円光の射して来る方へ盲めくらいた眼を向けるとよくも決心してくれました嬉うれしゆう思うぞえ、私は誰の恨うらみを受けてこのような目に遭あうたのか知れぬがほんとうの心を打ち明けるなら今の姿を外ほかの人には見られてもお前にだけは見られとうないそれをようこそ察してくれました。あ、あり難がたうござりますそのお言葉を伺うかがいました嬉うれしさは両眼を失うたぐらには換かえられませぬお師匠様や私を悲嘆に暮くれさせ不仕合わせな目に遭あわせようとした奴やつはどこの何者か存じませぬがお師匠様のお顔を変えて私を困らしてやると云うなら私はそれを見ないばかりでござります私さえ目しいになりましたらお師匠様のご災難は無かつたのも同然、せつかくの悪わるく企たくみも水の泡あわになり定めし其奴そやつは案に相違していることござりましようほんに私わたくしは不仕合わせどころかこの上もなく仕合わせでござります卑ひ怯きような奴うらの裏うらを搔かき鼻をあかしてやったかと思えば胸がすくようござります佐助もう何も云や

んなと盲人の師弟相擁あいようして泣いた

○

禍わざわいを転じて福と化した二人のその後の生活の模様もようを最もよく知っている生存者は嶋沢しぎさわてる女あるのみである照女は本年七十一歳春琴の家に内弟子として住み込んだのは明治七年十二歳の時であった。てる女は佐助に糸竹の道を習う傍かたわら二人の盲人の間を斡旋あつせんして手曳てひききとも付かぬ一種の連絡係りを勤めたけだし一人は俄盲目にわか一人は幼少からの盲目とは云え箒はしの上げ下しにも自分の手を使わず贅沢ぜいさくに馴なれて来た婦人の事故じゆせ是非ともそう云う役目を勤める第三者の介在が必要でありなるべく気の置けない少女を雇やとうことにしていたがてる女が採用されてからは実体じつていなどころが気に入られ大いに二人の信任を得てそのまま長く奉公をし、春琴の死後は佐助に仕えて彼が検校の位を得た明治二十三年まで側に置いてもらつたと云う。てる女が明治七年に始めて春琴の家へ来た時春琴は既に四十六歳遭難そうなんの後九年の歳月を経もう相当の老婦人であつた顔は仔細しさいがあつて人には見せないまた見てはならぬと聞かされていたが、紋羽もんはぶたえ二重の被布ひふを着て厚い座布団の上に据すわり浅黄鼠あさぎねずの縮ちぢ

緬りめんの頭巾ずきんで鼻の一部が見える程度に首を包み頭巾の端が眼瞼まぶたの上へまで垂たれ下るよう
し頬ほおや口なども隠かくれるようにしてあつた。佐助は眼を突いた時が四十一歳初老に及んでの
失明はどんなにか不自由だったであろうがそれでいながら痒かゆい処へ手が届くように春琴を
労いたわり少しでも不便な思いをさせまいと努める様は端はたの見る目もいじらしかつた春琴もま
た余人の世話では氣に入らず私の身の周りの事は眼明きでは勤まらない長年の習慣故佐助
が一番よく知っていると云い衣裳の着付けも入浴も按摩あんまも上じょう廁しもいまだに彼を煩わづらわした。
さればてる女の役目と云うのは春琴よりもむしろ佐助の身の用を足すことが主で直接春
琴の体に触ふれたことはめつたになかつた食事の世話だけは彼女が居ないとどうにもならな
かつたけれどもその外ほかはただ入用な品物を持ち運び間接に佐助の奉公を助けた例えば入浴
の時などは湯殿の戸口までは二人に附いて行きそこで引き返さかつて手が鳴つてから迎むかえに行
くともう春琴は湯から上つて浴衣を着頭巾を被かぶつているその間の用事は佐助が一人で勤め
るのであつた盲人の体を盲人が洗つてやるのはどんな風にするものかかつて春琴が指頭を
もつて老梅ろうばいの幹を撫なでたごとくにしたのであろうが手数かの掛かかることは論外であつたろ
う万事がそんな調子だからとてもややこしくて見ていられない、よくまああれでやって行
けると思えたが当人たちはそう云う面倒を享きょう樂らくしているものごとく云わず語らず細

やかな愛情が交されていた。按ずるに視覚を失った相愛の男女が、觸覚の世界を楽しむ程度は到底われ等の想像を許さぬものがあるうさすれば佐助が、猷身的に春琴に任せ春琴がまた怡々としてその奉仕を求め互に倦むことを知らなかつたのも訝しむに足りない。しかも佐助は春琴の相手をする余暇を割いて多くの子女を教えていた当時春琴は一室に垂れ籠めてのみ暮らすようになり佐助に琴台と云う号を与えて門弟の稽古を全部引き継がせ、音曲指南の看板にも鴎屋春琴の名の傍へ小さく温井琴台の名を掲げていたが佐助の忠義と温順とはつとに近隣の同情を集め春琴時代よりかえって門下が賑わっていた滑稽な事は佐助が弟子に教えている間春琴は独り奥の間において鶯の啼く音などに聞き惚れていたが、時々佐助の手を借りなければ用の足りない場合が起ると稽古の最中でも佐助々々と呼ぶすると佐助は何を措いても直ぐ奥の間へ立つて行ったそんな訳だから常に春琴の座右を案じて出教授には行かず宅で弟子を取るばかりであった。ここに一言すべきことはその頃道修町の春琴の名家鴎屋の店は次第に家運が傾きかけ、月々の仕送りも途絶えがちになつていたのであるもしそう云う事情がなければ何を好んで佐助は音曲を教えようぞ忙しい合間を見つつ春琴の許へ飛んで行つた片羽鳥は稽古をつけながらも気が気でなかつたであろうし春琴もまた同じ思いになやんだであろう

○

師匠の仕事を譲り受けて瘦腕ながら一家の生計を支えて行つた佐助はなぜ正式に彼女と結婚しなかつたのか春琴の自尊心が今もそれを拒んだのであろうか。てゐる女が佐助自身の口から聞いた話に春琴の方は大分気が折れて来たのであつたが佐助はそう云う春琴を見るのが悲しかつた、哀れな女気の毒な女としての春琴を考えることが出来なかつたと云う。畢竟めしいの佐助は現実眼を閉じ、永劫不変の觀念境へ飛躍したのである彼の視野には過去の記憶の世界だけがあるもし春琴が災禍のため性格を変えてしまつたとしたらそう云う人間はもう春琴ではない彼はどこまでも過去の驕慢な春琴を考えるそんでなければ今も彼が見ているところの美貌の春琴が破壊されるされば結婚を欲しなかつた理由は春琴よりも佐助の方にあつたと思われ。佐助は現実の春琴をもつて觀念の春琴を喚び起す媒介としたのであるから対等の關係になることを避けて主従の礼儀を守つたのみならず前よりも一層己れを卑下し奉公の誠を尽して少しでも早く春琴が不幸を忘れ去り昔の自信を取り戻すように努め、今も昔のごとく薄給に甘んじ下男同様の粗衣粗食を受け収入の

全額を挙げて春琴の用に供したその他経済を切り詰めるため奉公人の数を減らし色々の点で節約したけれども彼女の慰安いあんには何一つ遺漏いろうのないようにした故ゆえに盲目になつてからの彼の労苦は以前に倍加した。てる女の言によれば当時門弟達は佐助の身なりが余りみずばらしいのを気の毒がり今少し辺幅へんぶくを整えるように諷ふうする者があつたけれども耳にもかけなかつたそして今もなお門弟達が彼を「お師匠さん」と呼ぶことを禁じ「佐助さん」と呼べと云いこれには皆みなが閉口してなるべく呼ばずに済まそうと心がけたがてる女だけは役目の都合上つごうそう云う訳に行かず常に春琴を「お師匠様」と呼び佐助を「佐助さん」と呼び習わした。春琴の死後佐助がてる女を唯ゆい一いつの話相手とし折に触れては亡なき師匠の思い出に耽ふけつたのもそんな関係があるからである後年彼は検校となり今は誰だれにも憚はばみからずお師匠様と呼ばれ琴台先生と云われる身になつたがてる女からは佐助さんと呼ばれるのを喜び敬称を用いるのを許さなかつたかつててる女に語つて云うのに、誰しも眼が潰つぶれることは不仕合わせだと思ふであろうが自分は盲目になつてからそう云う感情を味わつたことがないむしろ反対にこの世が極楽浄土じやうどにでもなつたように思われお師匠様とただ二人生きながら蓮はすの台うてなの上に住んでいるような心地がした、それと云うのが眼が潰れると眼あきの時に見えるなかつたいろいろのものが見えてくるお師匠様のお顔なぞもその美しさが沁しみ々と見え

てきたのは目しいになつてからであるその外手足の柔かき肌はだのつやつやしきお声の綺麗きれいさもほんとうによく分るようになり眼あきの時分にこんなにまでと感じなかつたのがどうしてだろうかと不思議に思われた取り分け自分はお師匠様の三味線の妙音を、失明の後に始めて味みじ到とうしたいつもお師匠様は斯道しどうの天才であられると口では云つていたもののようやうその真価まけが分り自分の技ぎ倆りょうの未熟みじゆくさに比べて余りにも懸隔けんかくがあり過ぎるのに驚き今までそれを悟さとらなかつたのは何と云うもつたないことかと自分の愚おろかさ省おみられたされば自分は神様から眼あきにしてやると云われてもお断りしたであろうお師匠様も自分も盲目なればこそ眼あきの知らない幸福を味あじえたのだと。佐助の語るところは彼の主観の説明を出でずどこまで客観と一致するかは疑問だけれども余事はとにかく春琴の技芸は彼女の遭難そうなんを一転機として顕著けんちやくな進境を示したのではあるまいか。いかに春琴が音曲おんぎよくの才能に恵まれていても人生の苦味酸味を嘗なめて来なければ芸道の真諦しんたいに悟ご入にゆうするとはむずかしい彼女は従来甘やかされて来た他人に求むるところは酷こくで自分は苦勞も屈くつじ辱よくも知らなかつた誰も彼女の高慢こうまんの鼻を折る者がなかつたしかるに天は痛烈つうれつな試練しれんを降くだして生死の巖頭がんとうに彷徨ほうこうせしめ増上慢ぞうじょうまんを打ち砕くだいた。思うに彼女の容貌を襲おそつた災禍さいかはいろいろの意味で良薬となり恋愛においても芸術においてもかつて夢想だもしな

かつた 三昧境さんまいきょうのあることを教えたであろうてる女はしばしば春琴が無聊ぶりようの時を消す
 ために独りで絃を弄もてあそんでいるのを聞いたまたその傍に佐助が恍惚こうこつとして項を垂うなじれ一心に
 耳を傾かけている光景を見たそして多くの弟子共は奥の間から洩もれる精妙せいみょうな撥ばちの音を訝いぶか
 しみあの三味線には仕掛しかけがしてあるのではないかなどと眩つばやいたと云う。この時代に春琴
 は弾ひ絃の技巧ぎこうのみならず作曲の方面にも思いを凝こらし夜中密ひそかにあれかこれかと爪弾つまびきで
 音を綴つづつていたてる女が覚おぼえているのに「春鶯しゆんのうでん囀」と「六の花」の二曲があり先日聞
 かしてもらったが独創性に富み作曲家としての天分を窺き知するに足りる

○

春琴は明治十九年六月上旬より病氣になつたが病む数日前佐助と二人中前裁なかせんぎいに降り愛あい
 玩あその雲雀ひばりの籠かごを開けて空へ放つた照女が見ていると盲人の師弟手を取り合つて空を仰あおぎ
 遥はるかに遠く雲雀の聲が落ちて来るのを聞いていた雲雀はしきりに啼なきながら高く高く雲間
 へ這はい入りいつまでたつても降りて来ない余り長いので二人共氣を揉もみ一時間以上も待つて
 みたがついに籠に戻らなかつた。春琴はこの時から怏おう々おうとして樂しまず間もなく脚氣かっけに

罹り秋になつてから重態に陥り十月十四日心臓麻痺で長逝した。雲雀の外に第三世の天鼓を飼つていたのが春琴の死後も生きていたが佐助は長く悲しみを忘れず天鼓の啼く音を聞くごとに泣き暇があれば仏前に香を薫じてある時は琴をある時は三絃を取り春鶯囀を弾いた。それ緇蛮たる黄鳥は丘隅に止るとと云う文句で始まつているこの曲はけだし春琴の代表作で彼女が神魂を傾け尽したものであろう詞は短いが非常に複雑な手事が附いている春琴は天鼓の啼く音を聞きながらこの曲の構想を得たのである手事の旋律は鶯の凍れる涙今やとくらんと云う深山の雪の※けそめる春の始めから、水嵩の増した溪流のせせらぎ松籟の響き東風の訪れ野山の霞梅の薫り花の雲さまざまな景色へ人を誘い、谷から谷へ枝から枝へ飛び移つて啼く鳥の心を隠約の裡に語っている生前彼女がこれを奏でると天鼓も嬉々として咽喉を鳴らし声を絞り絃の音色と技を競つた。天鼓はこの曲を聞いて生れ故郷の溪谷を想い広々とした天地の陽光を慕つたのであろうが佐助は春鶯囀を弾きつゞどこへ魂を馳せたであろう触觉の世界を媒介として観念の春琴を視詰めることに慣らされた彼は聴覚によつてその欠陥を充たしたのであろうか。人は記憶を失わぬ限り故人を夢に見ることが出来るが生きている相手を夢でのみ見ていた佐助のような場合にはいつ死別れたともはつきりした時は指せないかも知れない。ちなみに云う春

琴と佐助との間には前記の外に二男一女があり女兒は分ぶん 媿べん後に死し男児は二人共赤子の
 時に河内かわちの農家へ貰もらわれたが春琴の死後も遺わすれ形見には未練がないらしく取り戻そうとも
 しなかつたし子供も盲人の実父の許もとへ歸るのを嫌きらつた。かくて佐助は晩年に及び嗣子ししも妻
 妾いしよもなく門弟達に看護されつつ明治四十年十月十四日光譽春琴惠照禪定尼しよの祥月しょうつきめ
 命いにち日に八十三歳と云う高こう齡れいで死んだ察する所二十一年も孤独で生きていた間に在りし
 日の春琴とは全く違つた春琴を作り上げいよいよ鮮あざかにその姿を見ていたであらう佐助が
 自ら眼を突いた話を天童てんりゆうじ寺の峩山がさん和尚おしょうが聞いて、てん 瞬しゆんの間に内外ないげを斷じ醜みにを美に
 回した禅機を賞し達人の所為しよいに庶幾ちかしと云つたと云うが読者諸賢しよけんは首肯しゆこうせらるるや否
 や

(昭和八年六月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学014 谷崎潤一郎」筑摩書房

2008（平成20）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十三巻」中央公論社

1982（昭和57）年5月25日

初出：「中央公論」中央公論社

1933（昭和8）年6月

※表題は底本では、「春琴抄《しゅんきんしょう》」となっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春琴抄

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>